

---

# Home Sweet Home

ミナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Home Sweet Home

### 【コード】

N8501Y

### 【作者名】

ミナ

### 【あらすじ】

妻を亡くした直輝と、その家にハウスキーパとして働きに行く女子高生有衣。寂しさを抱えるふたりは、やがて…？

目の前に聳え立つ、一見してすぐにそれとわかる高級マンション。18年と少しのこれまでの人生では、あまりに無縁だったそんな建物に、有衣（ゆい）はかなり気後れしていた。

エレガントなその建物とは対照的に、有衣は腕がもげそうなほど重い買い物袋を下げていたからだ。

今日は月曜日。その袋には、6日分の食料品が詰められるだけ詰まっている。

人手不足で清香（さやか）さんの会社に駆り出されて、のこのこと来てはしまったけれど、本当によかったのだろうか。

こんなマンションに住んでいるなんて、一体どんな人が待っているのか。

柄にもなく不安になっていたが、ガードマンの寄こした視線に慌てて、エントランスへ入っていく。

震える手で3301号室のボタンを押し、インターフォンで呼び出すとすぐに応答があった。

「はい」

やわらかな声だった。

有衣は少しだけ、緊張が和らぐのがわかった。

「あの、KSスタッフの川名（かわな）と申しますが」

「ああ、どうぞ。エレベータの脇でもう一度呼び出してくださいね」

「わかりました」

インターフォンが切れ、代わりにロックが外されたドアが開く。

恐る恐る中へ進むと、エレベータホールがあり、エレベータは6基設置されていた。

下層階、中層階、上層階用、そして上り下りの専用それぞれ分かれているらしい。

31階から上層階用と表示されており、ドアの脇には何かを読み取

るようなパネルと、インタフォン。

そういえばもう一度呼び出して、と言われたのだと思いだして、呼び出す。

「ドアが開いたら乗って、33階へどうぞ。着いたら一番左のドアです」

「わかりました」

少し待っていると、音もなくエレベータのドアが開く。

嚴重なセキュリティの様子に、また少し緊張がぶり返し、不安な気持ちで乗り込んだ。

ゆっくりと上昇する箱の中で有衣は、今から向かう家について頭の中でおさらいしていた。

今まで担当していた坂井（さかい）さんによると、家の主は西岡

直輝さん、30歳、3歳の息子晴基くんがいる。

医師で日曜日以外にはほとんど休みがなく、ハウスキーピングが必要なのは平日と土曜日。

主に必要とされているのは食事と晴基くんの世話、掃除と洗濯はついでで良いらしい。

有衣がこの家に来たのは、その坂井さんが産休を取ることになったからだ。

人手不足に困った清香さんが、ちょうど受験も一区切りついて暇だろうと有衣に話を持ち込んだのである。

夏休みも終盤、確かに暇を持って余していたため、断る理由もなく結局行くことに決まってしまった。

我が母親ながらまったく押し強い人だ、と思い出して小さく溜息をこぼす。

ちょうどそこで目的の階に着いたらしく、上昇が止まって少しだけ浮遊感がした。

エレベータを降りると、ドアは4つしかなかった。

そのドアとドアの間隔は、庶民の有衣からすれば、果てしなく遠かった。

一番左のドアへとかく向かい、今日3度目のインタフォンを鳴らす。

応答はなく、少しの間あと、代わりにドアが開けられた。

出てきたのは、男性にしては色の白い、優しそうな目の人だった。

「川名さん？」

「はい。はじめまして」

「こんにちは！」

有衣の声にかぶるように、大きな声が下のほうから聞こえた。

「あ、こんにちは」

挨拶を返すと、にこにここと満面の笑みを浮かべた小さなかわいい男子の子。

その顔を見て一気に緊張が解けた有衣は、つられてこちらもにこにここと笑顔を返した。

その様子を、直輝が少しだけ驚いたように、眩しそうに見たことは、気づかなかった。

玄関に入るとすぐに、さりげなく重たい荷物が引き受けられ、一瞬戸惑ったが促されるまま中へ入った。

広いリビングに通されてソファを勧められ、落ち着かない気持ちで腰を下ろすと、横に晴基が来る。

「ひろみさんよりも、としした？」

「ひろみさん？」

「こないだまで、きてくれてたの」

「ああ、坂井さん。よりも、年下だよ」

「じゃあ、なにちゃん？」

年下だと、ちゃん付けになるのか。

くりくりとした目で期待を込められて見つめられると、こそばゆい気分になった。

「有衣っていうの」  
ガチャンッ。

食器が激しくぶつかる音に、キッチンへ目を向けると、信じられない物を見るような目がこちらを向いていた。  
何だろう。何かしただろうか。

急に不安な気持ちに襲われて見つめ返していると、やがてぎこちなく視線は外された。

「ゆいちゃん」

小さな声に、有衣ははっとして晴基に視線を戻す。

「かわいいなまえだね」

「ありがとう」

「うん。あのね、おんなのこになまえをきいたらね、そういうんだって」

そんなかわいい言葉に、不安も忘れて思わず吹き出してしまった。  
こんな小さい子に、そんな言葉を教えるなんて、と思うとおかしくてたまらない。

「誰が教えてくれたの？」

「ほいくえんの、たけせんせい」

秘密を教えるように、ひそひそ声で話す晴基はかわいい。

有衣は一人っ子で小さな子どもと接したことはあまりなかったが、子ども独特の温かさが好きだった。

「じゃあ、今度は私に名前を教えてくれるかなあ」

「うん。ぼくね、ハルだよ」

「ハルくん？」

「うん。はるきっていうの。みんなハルってよぶよ」

頷いたところで、お茶を入れたトレイを持った直輝がこちらへ来る。有衣を見る顔は、最初よりもやや強張って見えた。

「ハル、こつちにおいで」

向かい側のソファに腰を下ろした父親に呼ばれ、晴基は素直に従ったが、その表情には不満が表れている。

晴基は有衣をじつと見ながら、しょんぼりとソファに座った。

黙ってお茶を勧め、言いにくそうに直輝は切り出した。

「君は、名前が…」

少しだけ苦しげにも聞こえた声に、有衣は内心首を傾げていた。

先ほどの派手な食器の音を思い出し、そういえば名前を言っていた時ではなかったか、と思いついた。

「あの、川名 有衣ですが。それが何か…」

「唯一のゆい？」

「いえ。有り無しの有に、衣です」

「…そう」

名前が一体どうしたのだろう。漢字まで聞かれるとは。

固く強張った声の調子と、聞かれていることの不自然さに、有衣はもう少しで取り乱しそうだった。

有衣は、顔を俯けてソファに押しつけていた体をもそもぞと動かし、寸でのところで思いとどまったのだ。

しばらくの沈黙のあと聞こえた声は、最初に聞いたやわらかな声に戻っていた。

そっと窺い見た感じからすれば、表情の強張りも解けたように見え、有衣はほっとする。

それから、一週間のスケジュールややるべきことのリストなどを見せてもらい、大まかな内容を頭に入れる。

その後一通り部屋の中を案内された。

書斎として使っている部屋は、掃除もしなくてよい代わりに、入らないでほしいと言われた。

ベッドルームには、大きなベッドと子どもよりの小さなベッドが並べられていた。

ベッドルームという場所に、有衣は奇妙な緊張を覚え、そんな自分が不思議だった。

最後に、出入りが自由にできるようにと、鍵が渡される。

それは見慣れていた銀色のものではなく、ICカードキーで、使い方を説明してもらわねばならなかった。

エントランス、エレベータ、玄関で、それぞれパネルに翳せばよいということらしい。

いったんドアが閉まるとロックされるため、いつでも持ち歩く必要があるということだった。

なんだか別の世界の出来事のような、不思議な感覚を有衣は味わっていた。

「取り急ぎという感じで悪いんだけど。大体の説明はわかってくれたかな」

「あ、はい」

「多分言い忘れないと思うんだけど」

「なまえ！」

晴基の言葉で、思い出したように笑った直輝は、説明を付け加える。

「苗字で呼ぶのはダメなんだ」

「え？」

「君のことを、有衣ちゃんと呼んでもかまわないかな。苗字で呼ぶと、ハルに直されるんだ」

「…もしかして、坂井さんのこともずっと名前で呼んでたんですか？」

「そうなんだよ。ハルはこういふところ頑固で困ってる」

情けなさそうに眉を少し下げた顔に、有衣は思わず笑った。

晴基と同じように、ひろみさん、と呼ぶ姿を想像してしまったからだ。

それと同時に自分が、有衣ちゃん、と呼ばれることを考えると、どこかふわふわとした気分になった。

「それと、呼びづらいだろうから申し訳ないんだけど。俺のことも、苗字では呼ばないでくれるかな」

「えっ？ で、でも…」

「苗字で呼ばれるとハルも反応してしまって、いちいち面倒なんだ。いくら言い聞かせても、ぼくも西岡さんだよ、なんて言っただけで聞かないし」

苦いものを嚙んだような顔で話す直輝のそばで、晴基はそれを気にも留めずにこにこと笑っている。

有衣はなんだかおかしくなってしまうたが、その要求を飲むことにする。

「わかりました。じゃあ、晴基くんはハルくんで、西岡さんは直輝さんで、いいですか？」

「それでいいよ。これからよろしく頼む」

頭を下げられて、有衣も慌てて頭を下げた。

新しいハウスキーパのために、無理に半休を取ったらしい直輝は、説明を終えた後慌てて病院へ出て行った。

別世界みたいなマンションも、妙な質問も、一瞬の強張った表情も、気にはなつたが、

このふたりと、特に晴基と過ごすのは楽しそうだ、と思った有衣は、ここに来てよかったと早くも思った。

## 01 (後書き)

このお話は、あたたかい雰囲気を目指したいと思います。  
どうぞしばらくお付き合いくださいませ。

仕事は夕方から始まる。

まず最初にすることは晴基を保育園に迎えに行くこと。

カメラ付きのインタフォンで到着を告げると、先生が晴基を外に連れてきてくれる。

ここまでしないといけないとは、本当に物騒な世の中になったものだ、初めて来たときには驚いた。

有衣を見つけた晴基の顔は本当にうれしそう、その笑顔を見ると有衣も嬉しくなる。

それから、手をつないで一緒にマンションへ歩いて帰る。

そして、夕食の準備をして一緒に食事し、後片付けも一緒にする。

最初はひとりで片づけていたのだが、一度お皿を運んでもらったら、お手伝いが嬉しいらしいとわかったので、

以来ずっと、運べるものはすべて晴基に運んでもらうことにしている。

お皿一枚、コップ一個、と効率は悪いが、一生懸命運ぶ姿は実に微笑ましい。

「上手に運べたね」

「ありがとうね」

運んでくれるたびにそんな言葉をかけてあげると、晴基は嬉しそうにしてますます一生懸命働いた。

食器を洗っている間、晴基は有衣の足もとで本を広げている。

後片付けが終わると、しばらくはお遊びタイムだ。

晴基がはまっているのは、積み木遊びと、レールの上で電車を走らせる遊びだ。

ひととおり気が済むまで遊んだら、晴基が片づけている間に有衣も手早く掃除し、今度は入浴。

さすがに有衣は入らないが、浴室に一緒に行ってあげてお手伝い。

浴槽に入ったら100まで数えるのが、お風呂でのルールらしい。途中つかえながらも数え上げると、どうだ！とばかりの誇らしげな顔で有衣を見上げる。

そんなひとつひとつの仕草や表情が、有衣にはかわいくてたまらなかつた。

髪にドライヤをかけてあげて、歯磨きを終えた晴基をベッドルームへ連れていく。

晴基の寝つきの良さには、毎回驚かされる。

ベッドに入って、掛け布団をかけてあげると、ものの2、3分で寝息を立て始めるのだ。

眠る前はぐずつく子も多いと聞くが、晴基がそうしたことは一度もなかつた。

有衣はいつも、晴基が眠るとすぐにベッドルームを出ていく。

最初に感じた奇妙な緊張感が、いつまでも抜けないせいだ。

晴基の小さなベッドの隣の、大きなサイズのベッドが否応なしに目に入るせいで、意識せずにいられなくなる。

このマンションで直輝に会ったのは、最初の1回だけなのに、なぜか気になる。

やわらかな声が耳から離れないし、情けなさそうに笑った顔も、なぜか強張った顔も、脳裏に焼き付いている。

それらを振り払うように、部屋の中を点検し、玄関以外の電気を消して部屋を出る。

そうすると、だいたい夜の8時半を過ぎる頃だ。

家に着くのは9時10分過ぎ頃で、まだ会社にいる清香さんに軽い夜食を作ってあげてから、2階に上がる。

清香さんは忙しい人だったから、家事をするのは慣れている。

それにオプシヨンで晴基が付いてきた、というくらいのイメージで、西岡家での仕事は楽しいものだった。

通い始めて2週間、無味だった夏休みが、気づけば充実していた。

いつも通り帰ろうとした時、携帯を持っていないことに気づいた。どこに置いただろうか、とキッチンやリビングを探し回るうちに、ふと写真が目に入る。

たくさん写真たちの中で、ひと際目を引いた2枚の写真。

直輝と、儂げに笑った綺麗なひとの写真、それからそのひととまだ生まれたばかりと思しき晴基の写真だった。

「ハルくんのママだ…」

どうして今まで気づかなかったのだろう、と不思議なくらい際立って見えた。

有衣はなぜだか、目が離せなくなっていた。

と、急に大音量の着うたが流れた。

まるで悪いことをしていたときのように、有衣の体はびくりと揺れる。

音が聞こえたのは、ベッドルームのほうからだった。

これでは眠った晴基が起きてしまう、と慌ててベッドルームへ向かう。

急いで携帯を床から拾い上げ、ボタンを押して音を止める。

晴基は起きていないように見えた。

けれど、不自然なまでに息を詰めている様子が有衣に伝わる。

「ハルくん」

声をかけると、ぴくりと小さく肩が揺れる。

その様子を見て、有衣は自分が小さなころのことを急に思い出した。父親が亡くなった直後、清香さんを心配させまいと、每晚よく眠れるふりをしたことがある。

本当はショックで眠れなかったのに、寝ないと清香さんが心配するから、だから必死で寝たふりをしていた。

晴基ももしかしたら、そうだったのではないか、と思った。

「ハルくん。音で起きちゃったかな。それとも、さつきからずっと起きてたかな」

怒っている、と思われぬように、優しく静かに話しかけてみることにした。

晴基は反応を返さなかったが、有衣は辛抱強く待つことにする。

やがて晴基は、もそもそと動き出し、寝返りを打って有衣のほうを向いた。

「ゆいちゃん」

「なあに？」

「ぼく、ねてなかったの」

「うん。そっか…」

「おこらない？」

「怒らないよ」

有衣が晴基の頭を撫でてあげると、晴基は照れたように笑った。

それから、不思議そうに有衣の顔を見上げる。

「ゆいちゃん、ぼくがねてなかったの、どうしてしてたの？」

ひろみさんもしらなかつたんだよ。ゆいちゃん、すごいねえ」

「うーん…ハルくんと、おんなじだったから、かな」

「おんなじ？」

意味がわからずとも、“おんなじ”という言葉には惹かれるらしい。

晴基は少しだけ、嬉しそうな顔をした。

「ハルくんにはママがいらないんだよね」

「うん。ママはしゃしんだけなの」

「私にはね、パパがいらないんだ。パパが、写真だけなの」

「パパがいらないの？ ぼく、パパはいるよ。」

ゆいちゃんは、パパがいなくて、かわいそうね…」

晴基の無垢な言葉が、有衣の心に染みた。

片親がいらないという事実は同じなのに、自分にはいる父親が有衣にはいないことがかわいそうだと言う晴基。

「ハルくんは、優しいね」

「やさしいと、うれしい？」

「うん。嬉しいよ」

「じゃあ、いっぱいやさしくなる！」

あのね、ゆいちゃんパパがいなくてかわいそうだからね、ぼくがゆいちゃんのパパになってあげるよ」

「ふふ、ありがとう」

とってもいいことを思いついた！と言わんばかりの口調に、有衣は思わず笑顔になった。

小さい子どもの考えることは、とてつもなく大きい。

でも優しさが嬉しくて、かわいくて、こんな小さなパパができるのもいいかもしれない。

有衣は幸せそうにほほ笑んだ。

「それでね。ゆいちゃんは、ぼくのママになるの」

「えっ？」

そのとんでもない言葉に、有衣の表情は一瞬強張った。

晴基が有衣のパパになる、という言葉とは、持つ意味も重要度も、次元のまったく違うものだったからだ。

「いつもじゃなくていいの。ぼくがおねがいしたら、そのときだけママになって」

それでもけな気に言い募る晴基に、有衣はどうしても頷かざるをえなかった。

多分、晴基は母親がいけないという自分の特異性を、保育園という小さな世界だけでも十分に感じているだろう。

その疎外感を、たとえその場しのぎだとしても、少しでも軽くしてあげたいと有衣は思った。

「じゃあ、ハルくん。ひとつだけ約束できるかな」

「なあに？」

「今のお話はね、パパには内緒にするの」

「どうして？」

「うん。パパが悲しくなるかもしれないから。」

ハルくんがパパに秘密にできるなら、それならハルくんがなつてほしいときに、ママになつてあげる」

晴基は、しばらくうーん、と悩んでいたが、やがて笑顔になつて頷いた。

なぜ直輝が悲しくなるのかわからない様子だったが、有衣が承諾したことの嬉しさのほうに勝つたらしかった。

安心したところで眠気が襲ってきたようで、晴基は小さなあくびを何度もする。

それでも、目を閉じたらすぐに有衣がいなくなってしまうと思ひ、近くにあつた有衣の左手をぎゅっと掴んだ。

「ハルくん。ここにいてあげるから、眠くなつたら寝てもいいんだよ」

「…うん。いてね。やくそくだよ」

「約束」

すぐにも眠つてしまいそうだったが、それでも晴基の小さな手は有衣の左手を掴んで離さない。

有衣はその小さな手に、余っていた右の手をそつと載せてあげた。

ゆつたりとあやすように、その手を撫でてあげるうちに、晴基はやがて本当に眠りに落ちた。

晴基が眠つて、10分ほど経った。

いつもならすぐに帰るところだが、今日は帰れないでいた。

晴基の優しさと、内にある寂しさに触れて、しかもここにいてあげる、と約束してしまったから。

せめて直輝が帰ってくるまでは、いてあげなければいけない気がしたのだ。

そういえば、直輝がいつ頃帰ってくるのか、有衣は知らなかった。

いつも晴基がどれほどの時間この部屋でひとりきりで過ごしていたのか、知らなかった。

そして、晴基のことを考えるその片隅で、直輝に会いたいと思つて

いる自分がいることも、否定はできなかつた。

## 02 (後書き)

今回は、“有衣とハル、心の絆ができる”の巻でした。

ハルは大まじめに言っていました。が、実際ハルがパパだといろいろ大変そうです…(笑)。

まだひとり蚊帳の外の直輝。

この人が何を考えているのか、早く書きたいな、ということ。次回へ続く！です。

時刻は午後9時半を回っていた。

直輝はタクシーを急いで降り、足早にマンションに入っていく。

晴基が寝た後は、ハウスキーパは帰ることになっている。

そのため晴基が寝てから直輝が帰るまでの間、必然的に晴基はあの部屋にひとりということになる。

自分で出している条件ではあるが、実のところ直輝はそれが心苦しかった。

今はそんなことはなくなったが、最初の頃の晴基は、直輝が帰ると部屋で泣いていたものだ。

それでも今でさえ晴基はたった3歳であり、辛い思いをさせているに違いないのだ。

ただ、あまり遅くまで拘束するとハウスキーパ自体が派遣されないことが多いため、我慢させてしまっている。

ロックを外して玄関のドアを開けると、明るかった。

いつもは玄関の小さな明かりだけがついていてるのだが、今日は廊下もリビングの照明もついている。

消し忘れていったのだろうか、珍しい。

そんなことを思いながら脱いだ靴を仕舞おうと視線を下げると、小さなミニールが目に入った。

ということとは、まだ帰っていないのか。それこそ珍しいことだ。

直輝は、一度だけ会った新しいハウスキーパを思い浮かべた。

初めて部屋に来た時の緊張のかたまり、そして晴基の顔を見て一気にほころばせたその表情。

その劇的な変化の瞬間は、とても眩しく感じた。

年齢を聞いたことはないが、少なくとも自分よりは5つ以上は下だ

ろうと予想している。

若そうに見えるのに、料理はうまく 実のところひろみさんよりうまかったし、仕事はしっかりしている。

あまり重きを置かなくてよいと言った掃除も洗濯も、一通りこなしてくれている。

そして何より、晴基の懐きようが普通でない。

ひろみさんのことも大好きだったようだが、今回はそれ以上、いや比にならないほどだ。

朝食のときも、日曜の休みのときも、ずっとと言ってよいほど一緒に過ごした時間の話をしている。

そのせいで、一度しか会っていないのに、もう何度も会ったような気分になるほどだった。

それにしても、名前には驚いた。

ユイというのは、直輝の亡くなった妻と同じ名前だった。

初めて有衣の名前を聞いた時には思わず動揺してしまったが、今はそのことを少し後悔していた。

よくよく考えてみれば、べつに特別珍しい名前でもないのだから、同じ名前の人がいてもおかしくはない。

それに、あの時、有衣が見せた不安な表情が、直輝の脳裏に焼き付いていた。

幼ささえ感じるような痛々しさのようなものが見えた気がして、自分がひどく悪いことをしたような気になった。

胸が痛んだ、といってもいい。

唯が亡くなった後の直輝の心の動きとしては、それは非常に珍しいことだった。

しかし直輝はまだ、その事実を自覚してはいなかった。

目に入る範囲に有衣の姿はなく、かわりにテーブルの上に盛りつけられたから揚げの皿が載っている。

書斎は入らないように言っているから、有衣がいそうな場所に残りはベッドルームだけだ。

直輝は、自分のベッドルームであるにもかかわらず、なぜか若干の緊張を覚えてうろたえた。

そつとドアを開けると、晴基のベッドのそばに人影。

晴基の手を握りながら、ベッドにもたれかかっているのは。

「ゆ……」

唯、と言いそうになったところで、眩暈に似た感覚に襲われ、直輝は一度目をつぶった。

閉じた瞼の裏で、なぜ唯だと思ったのだろう、と思ったがわからなかった。

もう一度目を開いて同じ光景を見ると、そこにいるのは、確かに有衣だった。

どうしてか起こすのは躊躇われた。

良識的に考えて、帰すべき時間だということはわかってはいたが、直輝はそうしなかった。

晴基の寝顔が、安心しきっているように見えたせいもある。

晴基と、一緒になって眠ってしまった有衣、ふたりの姿にどこか胸が詰まった気がしたせいでもある。

それがどうしてか、直輝はわからなかったし、分析しようとも思わなかった。

とにかく有衣をそのままに、ベッドルームの扉をそつと閉め、直輝はバスルームへ向かった。

かすかに水の音が聞こえ、有衣は身動きした。

はつと意識が覚醒を促し自分がどこにいるのかを理解すると、さつと血の気が引いた。

あのまま晴基と一緒に眠ってしまったのだ。

しかも聞こえてくるこの音は、つまり家の主が帰ってきていること

を示しているに他ならない。

「ばか…！」

小声で自分を罵り、慌てて立ち上がるうとするが、晴基の手がまだしがみついたままだった。

少しかわいそうに思いながらもそつと小さな手を少しずつ剥がしたが、晴基は起きなかった。

ふりではないその眠る様子に安心して、リビングへ向かう。

時計を見ると、もう10時近くだった。

本来ならとうに家にいる時間と、思いの外長く眠っていたらしいことに気づき有衣はぎよつとした。

直輝がいつ帰ってきたのかはわからないが、玄関にあるミュールに気づかないはずはない。

それに、帰ってきてまず晴基を確認しないわけがない。

ということは、一緒になって寝こけていた自分の姿も一緒に見ただろう。

そんな風に簡単に推察できることを思い浮かべ、有衣はつい大きく溜息をついた。

帰らなければと思ったが、勝手に帰るわけにもいかない。

かといって、何もせずにただここで直輝を待つというのもおかしいことだ。

とりあえず清香さんに遅くなりそうだとメールを打ちながら考える。

直輝は食事をしてきたのだろうか。

晴基がひとりで待っていると思えば、仕事の後外で食事はしてこないだろう。

そう思い、ひとまず直輝の食事の準備をすることにする。

器に盛ってあった直輝の分をテーブルから手に取ると、当たり前だが冷めきっている。

今まではずっとレンジで温め直して食べていたのだろう、と思うと

なぜか切ない気持ちになった。

この広い部屋で、ひとりで食事をすることを考えると、寂しい。どうせなのでもう一度揚げ直してしまう。

夜遅いことを考えて大根をおろし、調味料を混ぜてタレを作っただけに仕上げたところで直輝が戻った。

バスルームから出た直輝は、キッチンから聞こえてくる物音に目を瞬いた。

有衣が起きたらしい、と思いながらリビングへ戻ると、キッチンで料理をしている有衣が目に入る。

いつもは自分で温め直している料理を、今日は有衣が温め直してくれているらしい。

キッチンで自分以外の誰かが働く姿を見るのは、かなり久しぶりのことだった。

しかも自分のために、と思うと直輝は素直にうれしかった。

「ありがとう」

カウンタ越しに声をかけると、有衣は少し気まずそうな、はにかんだ顔で振り返った。

「あの、すみません。うつかり寝ちゃって…」

「いや、いいよ。疲れてたんだろう。それより、時間大丈夫かな」

「あ、大丈夫です。メールしたので…」

そこで直輝はふと、誰にメールしたのだろう、と思った。

帰りを心配する誰かが、いるのだということが、引っかけたのだ。そんな自分の反応を初めて認めた直輝は、しばし呆然としてしまった。

テーブルに着いた直輝は、皿の上にあるものがさきほどまでのものと違うのに気付いた。

ただのから揚げだったものの上に、大根おろしと何やらタレが載っている。

この短時間の間に、自分のためにまたアレンジしたのだ、とわかり直輝は驚いた。

「いただきます」

お茶を入れてくれていている有衣に向かって言うと、嬉しそうに笑う。そんな有衣の表情に、あたたかなものを感じながら、直輝は箸を進めた。

直輝が食べ終わるのを待ってから、有衣は少しだけ緊張しながら切り出した。

「あの、ハルくんのことなんですけど」

「ハル？ 何か、悪さしたとか…？」

「いえ違います。やっぱり、少しの時間でもひとりにはできないと思っただんです。」

あの、つまり何が言いたいか、といいますと。

ハルくんが寝付いて、直輝さんが帰ってくるまで、ここで待っててもいいですか？ ということなんですけど」

直輝は、その言葉に驚いて有衣を見つめた。

ずっとそうしてほしかったが言えなかった条件を、有衣のほうから口に出したことが俄かには信じ難かった。

「どうして、そう思うの？」

「実は、今日初めて気づいたんですけど。…ハルくん、寝たふりをしてたんです。」

寝つきがよすぎるな、とは前から思ってたんですけど、ずっと気を遣ってそうしてきたみたいなんです」

それは初めて知った事実だった。

いつからかぱったりと、泣かずにベッドで眠っているようになった晴基。

“ふり”だったのかと思うと、なんてかわいそうなことをしていたのだろう、と胸が潰れそうに痛かった。

そして、それに気づいてくれた有衣のことがとてもありがたく、そ

の温かさが心に染みだ。

「ああ…それで、今日はハルと一緒にいてくれたんだね」

「はい、あの…寝てしまうつもりはなかったんですけど」

しゅん、としてしまった有衣を見て、直輝は吹き出してしまいそうになった。

それでも晴基のことをこんな風に思ってくれているのがわかって、嬉しい気持ちになる。

「それはいいんだ。むしろそんな風に、ハルのことを思ってくれてありがとう。」

有衣ちゃんの提案は、俺としては願ってもないことだけど、決めるのは会社を通してからにしよう」

受け入れてくれそうな雰囲気、有衣はほっとした。

時刻はかなり遅くなっていたが、晴基がいるため直輝が有衣を送ることはできない。

直輝が電話でタクシーをマンションの下に呼び出すのを、有衣は断ろうとしたが直輝は聞かなかった。

有衣はタクシーのお礼を言って、玄関から出ていく。

「それじゃあ…おやすみなさい」

ドアが閉まる間際、“さようなら”の代わりに有衣の口を衝いて出た挨拶。

その言葉が、直輝の中には温かい衝撃としてひろがった。

誰かに、そう言ってもらったのは…もつどれくらいぶりかわからなかった。

「…おやすみ」

ドアが閉まった後の玄関に、有衣の耳には届かなかった直輝の小さな声が響いた。

### 03 (後書き)

視点がころころ変わるので、読みにくい方いらっしやるかもしれませんが。ごめんなさい。

ハルを軸に、だんだん直輝と有衣が無意識下で近づいてきました。やっぱり、さみしいときには、あたたかいぬくもりが一番効くのですよね。

ちなみに有衣が作ったから揚げにのつけたおろしダレは、大根おろしに、お酢と醤油とみりんと一味とネギが入ったものです。揚げものでもさっぱりいただけただけでお勧めです

夏休みも終わり学校が始まると、一日はものすごく忙しくなった。朝から学校、終わると一度家に戻って制服を脱ぎ、晴基を迎えに行つて、一緒にスーパーへ買い物に行く。

そして夜まで西岡家で過ごし、遅い時間に家に戻って、翌日もその繰り返し。

清香さんも心配するハードな生活だが、有衣は楽しんでいた。むしろのめりこんでいる、と言つてもいいほどだ。

学校のない土曜日さえ、家にいられず午前中から会社でそわそわしだすという筋金入り。

土日だけ清香さんの会社でバイトをしている幼馴染みのみどりにも、それを見られてしまった。

「あんまり深入りしないようにね」  
そんなふうには釘を刺されるくらいには、呆れられている。

有衣の提案と直輝のお願いに、清香さんはあっさりうなずいた。

実は自分も昔有衣をひとりにしていたことを、かなり気にしてきたからだ。

有衣がそういう言うのなら、とすぐに了承したのを受け、直輝は何度も頭を下げた。

直輝は料金も上乘せすると言つたが、有衣があまりに固辞するので清香さんがやんわりと断つた。

ただ、そのかわり、直輝は有衣に月曜日のまとめ買いをやめてほしいと注文した。

一番最初に会つた時の、重い荷物を両手からぶら下げてふらついていた有衣を覚えていたからだ。

月曜日に一気に増える冷蔵庫の中身が、土曜日までにどんどん消えていくのは不思議な楽しみがあったが、

それでもあの重そうな姿を考えると、ずっと気の毒で仕方がなかった。どうせ必要経費は直輝がすべて出すことになっていいるのだから、とそれだけ頼んだのだ。一回一回買つと割高になると思ったが、あの重さから解放されるのは素直にありがたい、と有衣も了承した。

そんなわけで、今日も晴基と一緒に買い物だ。

「ゆいちゃん、きょうは、なにかう？」

「今日はねえ、かぼちゃが安売りなんだよ」

「かぼちゃ。ぼく、すき」

「ハルくん、チーズも好きだったよね？」

「うん。のびるの」

「じゃ、今日はかぼちゃのグラタンにしよう」

手をつないで店の入口まで歩き、カートに晴基を載せて中へ入った。晴基と一緒にマンションの近くのスーパーに買い物に行くようになって早3週間。

自然と顔なじみになる店員も増えてくるわけで。

入ってすぐの場所にある野菜コーナーへ行くと、よく顔を合わせる店員が近づいてくる。

晴基をかわいがってくれて、よく晴基に声をかけてくれるのだ。

「いらっしやい。今日のごはんは何かな」

「きょうは、かぼちゃのぐらたん！」

「そうかー。ママがお料理上手だといいねえ」

「うん！ なんでもつくれるの」

すっかり親子として認識されていることに、有衣はいつもながら戸惑いを感じる。

いいのだろうか、と思いつつも、晴基が嬉しそうに受け答えるので、つい何も言えずにいた。

店員が晴基と話をしてくれている間に、有衣は特売のかぼちゃと

ほうれんそうを手取る。

カートに放り込むと、店員に挨拶してその場を離れた。

とりあえず、今日必要なものはこれだけだ、とレジへ向かおうとすると、晴基が手をぽんと叩く。

「ゆいちゃん、おかし」

「あ、そっか。今日は土曜だもんね」

嬉しそうにする晴基をかわいいと思いつつ、お菓子のコーナーにカートを進める。

保育園のお友達から、買い物に行くたびに1つだけ好きなものを買ってもらえる、という話を聞いたらしい。

お願いされた有衣は、毎日とはよくないかなと思い、月木土と間を開けながら買ってあげることにしたのだ。

といつても、晴基はいつも100円もしないものばかりを選ぶ。

また遠慮しているのかと思いついてみたが、そうではないという。

どうやら“母親に買ってもらえる”という気分を味わえばそれでいいらしい。

つまり、スーパーにいるときは、晴基が有衣に“ママになってほしいとき”なのだ。

だから有衣はいつでも、内心の戸惑いを晴基の前ではひた隠しにして買い物をした。

戸惑いの理由には別の面もある。

直輝が会社から帰った後、清香さんは意味ありげに有衣を見た。

「有衣もそんな年頃かあ」

「…どんな年頃よ」

意味わかんないんですけど、と小さな声で付け足す。

「え〜？ わかんないならいいわよ」

軽く清香さんは言ったが、本当は有衣にも少しはわかっていた。

西岡家での仕事が楽しいのは、純粹に晴基だけを気にかけているからではないのだ。

それに加えて、夜の遅い時間帯に、直輝と過ごす時間がある。直輝が帰ってきてから食事の用意をし、直輝が食べるのを見ながら他愛もない話をする。

その時間は、あたたかく、有衣の心にすうつと入り込んでくる。そんな状態で、外で晴基の“ママ”を演じるのは、自分にとってよいこととは思えなかった。

みどりに言われたことと、ほぼ大差ないことを清香さんにも言われていた。

「ああいう人は、難しいところあるから。気をつけなさいね」

けれど、気をつけていてもいなくても、結局心の動きには既に抗えなくなっている気がした。

いつかカンチガイな行動に走ってしまいそうで、今の有衣は戸惑いと同時に少しの恐怖を抱えている。

物思いにふけりながら晴基の体の水滴をぬぐっていると、晴基がバスタオルから逃げ出した。

「あつ、こら！ ハルくん！！」

追いかけると、きゃーきゃー言いながら晴基が走って逃げる。

お風呂に入れてあげた後、晴基と追いかっこになるのはいつものことだ。

拭き終わらないうちに逃げるせいで、床にはぼたぼたと落ちた雫で道しるべができる。

ソファの上に行こうとした晴基を、寸でのところで抱きとめた。

「濡れたままソファはダメ！ これ皮なんだから」

「かわってなに？」

「水に濡れちゃいけないもの。もうダメだよ、ハルくん。ちゃんとして拭いて服着なきゃ」

「はい」

捕まればおとなしくなり、それからは逃げようとはしない。

晴基にとっておそらくゲームの一種なのだが、有衣はほとほと困っ

ていた。

「床の濡れたところ、ハルくんが拭くんだよー」

「わかったー」

でも素直に言うことを聞く晴基には、思わず笑顔が浮かぶ。

ちよつとのわがままくらい、許してあげちゃう気になるのだから、晴基の威力は大きい。

今日は園で遊び疲れていたのか、いつもより早く眠気が襲っていたようだった。

ベッドに入って、晴基の手を握ってあげるとすぐに晴基が眠ったのを見て、有衣は満足げに息をついた。

かわいくて、あたたかくて、いとしい存在だ。

寝顔を見てなごんでいると、聞きなれた電子音とドアの開閉音が聞こえた。

晴基から手を離し、起きないことを確認してから、有衣は直輝を迎えに行った。

「おかえりなさい」

有衣の姿を認めた直輝は、やさしい笑みをこぼした。

「…ただいま。ハルはもう寝ちゃった？」

「はい。なんだか、遊び疲れちゃってたみたいですよ」

「そっか」

土曜日は、直輝の帰りが少しだけ早い。

だからいつもなら、晴基も有衣と一緒に直輝を出迎えるのだ。

直輝の少しだけ残念そうな顔を見て、有衣の心は痛んだ。

それをごまかすように、お風呂を促した。

ちょうどグラタンが焼きあがったところ、直輝がバスルームから戻ってきた。

その濡れた髪から雫が時折ぼたぼたと垂れているのが見えて、有衣はこっそり笑った。

晴基と同じだ、父子ってこんなところまで似るのか、と思ったのだ。そんなことを思われているとは露知らず、直輝はキッチンに入り、冷蔵庫からビールを取り出す。

すると、冷蔵庫の中にジョッキが冷やされているのを見つけて、直輝は驚いた。

「…これ、有衣ちゃんか？」

「あ、今日は土曜日だから…飲むかなと、思って」

直輝の驚いたような顔が目に入り、有衣はなんとなくこそばゆい気分になった。

一緒に過ごしたこれまでで、土曜だけは直輝がビールを飲むことに気づいて、今日は準備してみたのだ。

気づいてもらえたことが、嬉しかった。

「お料理、運びますね」

なんだか恥ずかしさに居たたまれない気持ちになり、有衣は直輝のそばをすり抜けていく。

どこかふわふわした心地で、直輝はテーブルに着いた。

冷蔵庫の中のジョッキを目にした時に感じた何かが、まだじわじわと直輝の中に息づいていた。

そこに、どこかへ行ったと思った有衣が、タオルを手にして戻ってくる。

「あの、髪まだ濡れてます…」

タオルを差し出されて、直輝は自分の顔に熱が上るのがわかった。

週に一度、日曜日にだけお風呂に一緒に入る晴基のことを思い出した。

晴基も自分も、大してきちんと拭きもせずに歩きまわっている。

晴基を毎日のお風呂に入れてある有衣には、きっと似ていると思われた、と思うと気恥ずかしかった。

タオルを掴むと、お互いの指先が一瞬触れた。

直輝は内心ぎくりとし、有衣も内心ぎよっとしたが、ふたりとも表

には出さない。

ぎこちなく手が離れて、直輝はタオルで頭を覆った。

触れ合った指先が、熱かった。

#### 04 (後書き)

これぞ、“疑似家族”な感じになってきました。直輝よりも一足先に、有衣の中では恋愛感情が育ってきてる模様です。

ちなみに直輝はまだ無自覚。

しかもそのうえ臆病と鈍感のダブルパンチ^^;

どうなることやら、です。

さて、今回のかぼちゃグラタン。

普通のホワイトソースに、味噌をちょびっと入れるのがコツです。

具はかぼちゃと玉ねぎと彩りのためにほうれん草。

チーズはたっぷりめで、ばっちりです。

晴基を迎えに行くと、今日は笑顔が二倍だった。

武先生に手をつながれて、小走りに近づいてくる。

「こんにちは」

「ゆいちゃん！」

武先生と晴基の声がかぶり、有衣は笑って挨拶を返した。

ちなみに武先生とは、例の、女の子に名前を聞いたら云々を晴基に教えた、あの“たけせんせい”だ。

最初会った時はかなり若く見えて驚いたが、逆にこの若さならあのレクチャーもあり得る、と有衣は思った。

晴基は、左手を武先生とつなぎ、右手に何か紙を持っている。

先生と挨拶を交わし、晴基を引き受けると、晴基は有衣に右手の紙を差し出してきた。

「はい、ゆいちゃん。あのね、おうちのひとにみせてね、っていわれたの」

「ありがとうね」

おうちの人は、厳密には直輝のことなのだが、まあいいか、と有衣は受け取る。

それは運動会のお知らせだった。そういえば、そんな時期か。

歩きながらお知らせをめくると、晴基の組のお遊戯の部についても書かれている。

「ゆいちゃんもくるでしょ？」

「うーん…パパに聞いてみないとね」

きつと、一生懸命でかわいいんだらうなあ、と見に行きたく思ったが、勝手に返事をするわけにはいかない。

今日は金曜日で、直輝の帰りはいつもと変わらず遅い。

晴基が寝た後では言い出しにくいし、明日まで待とう、と有衣は算段した。

相変わらず、夜の時間はあたたかい。

晴基の世話をして、晴基が眠るときにはベッドのそばで座っている。手に触れる晴基の体温は、有衣よりも少し高く、心地よい温かさだ。その穏やかな時間は、直輝が帰ってくるまで続く。

直輝が帰ると、今度は直輝がお風呂に入っている間に食事を用意し、一緒にテーブルに着く。

晴基の話をするときもあれば、直輝の病院の話をするこもあつた。そうして、晴基と過ごすのとは少し違う、べつの穏やかな時間が流れる。

今日の直輝は、テーブルの上にあつた運動会のお知らせを見ている。

「土曜日なんですね。お休み取れそうですか？」

「ああ、なんとかするよ」

「お遊戯とか、きつとかかわいいですよ。楽しみですねえ」

想像してみても笑顔で話す有衣を見ると、直輝は思わず言ってしまった。

「よかつたら、有衣ちゃんも行く？」

「え？」

驚いた有衣の顔を見て、直輝ははっと我に返つた。

こうして一緒に時間を過ごしていると、つい忘れてしまうのだ。

有衣は、お金を払つて家に来てもらっている、単なるハウスキーパなのだということ。

「あ、いや、ごめん……。俺が休みの日まで来てられないよね」

言い出しにくかつたことを直輝から言ってもらえて驚いただけだつた有衣は、慌ててしまった。

「ち、違います！ 行きたいなあつて思つてたところに誘つていただいて驚いたんです。

ハルくんも来てつて言つてくれたんですけど、直輝さんの考え次第だと思つてたので、あの…嬉しいです」

凄い勢いで直輝の言葉を否定し、最後に遠慮がちに嬉しいと言った有衣を、直輝は素直にかわいいと思った。

決して変な意味ではない、と思ったが、それでも胸が軽く締め付けられたような妙な痛みを感じていた。

「ありがとう。じゃあ、一緒に行ってくれるかな」

「はい」

笑顔で返事をした有衣を見ながら、直輝は自分の胸の痛みにも内心首を傾げた。

有衣が運動会に行けると聞いて、晴基の機嫌は底抜けによかった。ずっとつきつきして、お風呂に入るにも食事を取らせるにも、落ち着かせるのが大変なほどだった。

直輝が帰ったら、有衣の運動会行きを確かめるのだと、ずっと玄関を気にしていたが、

テンションが高すぎて体は疲れていたらしく、満腹になるとうつらうつらしてしまっただけだった。

「ハルくん、ベッド行く？」

「いかない。パパ、かえってくるの、まってる」

言いながらも、夢と現実の世界を行ったり来たり晴基に、有衣は苦笑した。

「じゃあ、ソファでひと眠りしようか。パパが帰ってきたら起こしてあげるから」

「うん。やくそくね。おこしてね」

「約束」

有衣が約束すると、ようやく何も言わずに目を閉じた。

脱力してかなり重く感じる晴基を抱きかかえて、有衣はソファへ移動して自分も座って晴基を横にならせる。

落ち着かない晴基の世話には、有衣も少し疲れを感じていた。

どうせ後片付けも部屋の掃除も一通り終わっている。

直輝が帰ってくるまで自分も休ませてもらう、と有衣も目を瞑っ

た。

水の音が聞こえた気がして、有衣ははっと目を覚ました。

聞こえていたのは、シャワーの水音と、窓に吹き付ける雨の音だったようだ。

「雨降ってるんだ…。あ、っていつか、また…！」

シャワーの音が聞こえるということは、直輝が帰ってきているということだ。

晴基と一緒にになってまたしても眠ってしまったって気づかなかった、ということに有衣は慌てた。

晴基を起こさないようにそっとソファから立ち上がり、急いで直輝の夕食の支度にとりかかる。

フライパンを火にかけていると、晴基が起きてきてキッチンの入口に立った。

「ゆいちゃん」

「あ、起きた？ パパお風呂入ってるから、もう少し待ってようね」「うん」

返事をしながら、晴基は有衣の近くに寄ってきて、そばにある椅子に座る。

本当は危ないからキッチンには入らせたくないが、離れているのが寂しいらしく、仕方なくそのままにしている。

「あれ？ ぼくがたべたのと、ちがうの？ あかいね！」

「そうだねえ。パパの分は辛いのが入ってるんだよ」

こんな風に有衣が料理をするのを、不思議そうに面白そうに見ている晴基が、かわいくもあつた。

バスルームのドアが開く音に、晴基は飛び上がるように反応した。

「パパ！」

「お、起きたかあ？ ただいま」

「おかいり」

「おかえりなさい。すみません、また…」

「ははっ、いいよいいよ」

笑いながら、直輝は冷蔵庫を開け、ビールと有衣の冷やしたジョッキを取り出す。

当然のように冷やされたジョッキと、当然のように取り出す動作が、直輝にも有衣にも温かいものを感じさせた。

有衣は直輝の濡れた髪を思わず盗み見るが、今日も零れる雫はなかった。

前にタオルを渡した時以来、直輝はよく拭いて出てくるようになった。

それを少し残念に思ったりしてしまうことに、有衣は少なからず苦いものを感じた。

直輝が帰って、晴基のハイテンションぶりは復活していた。

運動会のお知らせを持ってきて、食事をする直輝に纏わりついていく。

嬉しそうな晴基に、直輝も有衣も目を細めていたが、晴基の話はだんだんよくない方向へ行き始めていた。

「ゆいちゃん、あのね」

「なあに」

「みんなね、ママがおべんとつくるんだって」

有衣は、この晴基の言葉にぎくりとした。

スーパーで買い物の時に好きなものを買ってもらっ、という話をしたときと同じ語り口だったからだ。

あのとき晴基は有衣に、だからママになって、と言ったのだ。

直輝の前ではまずい、と慌てて晴基の名前を呼ぼうとしたが、間に合わなかった。

「だからね。ゆいちゃん、ママになって。それで、おべんとつくって？」

有衣は、ひゅっ、と息を吸い込んだ。

直後、直輝がテーブルに箸を置く、無機質な音が響いた。

しん、と静まり返ったとき、晴基ははっとなった。

ママになる話は直輝の前では内緒だ、と約束したのを思い出したのだ。

凍りついた有衣の表情を見て、晴基は急に不安になって、有衣のスカートをぎゅっと握りしめた。

「どういう意味だ？」

聞いたことのないような、直輝の低く硬い声に、晴基はびくりと体を揺らした。

有衣も、晴基と一緒にになってびくりとしたが、晴基がかわいそうでスカートを握る手をそっと握ってあげる。

「ハル、どういう意味だ、今の」

晴基は、恐ろしくなってしまう、何も言えなかった。

晴基と有衣の手をちらりと見て、直輝は今度は有衣に向き直る。

「君の様子だと、ハルがこういうことを言うのは、初めてじゃないんだね」

君、と言われたところに、他人行儀な雰囲気を感じて、有衣は心まで凍りそうになった。

けれど、すっかり怯えてしまっている晴基を矢面に立たすまいとして、有衣は事実を少ししか伝えなかった。

「わ、私が言ったんです」

「…何を？」

「ハルくんの、ママになってあげる、って…」

言った途端、直輝は派手な音を立てて椅子から立ち上がった。

晴基は、おろおろと目をさまよわせながら、ますます強く有衣のスカートを握りしめる。

直輝は有衣の目の前に立ち、晴基の手から乱暴に有衣の手を剥がし、晴基の手を有衣のスカートから外した。

その態度に、有衣は目の前が暗くなっていくのを感じた。

「君は自分が一体何を言ったのか、わかっているのか？」

ハルの母親だって？ ハルの母親はひとりしかいないし、誰も代わりになんかなれないんだ。

君がそんなことを考えてハルに接していたのかと思うと、怖くなつたよ。

悪いが、帰ってくれないか。今後のことは、会社を通して相談させてもらうことにする」

一気に突き刺さってきた言葉は、押し掛かるような重さを伴っていた。

有衣は俯いて、涙をこらえるだけで必死だった。

「すみませんでした」

やっとのことですれだけ口に出すと、立ちあがってお辞儀し、鞆を掴んで玄関へ足早に向かう。

「ゆ、ゆいちゃん！ ゆいちゃん！！」

悲鳴に近い声が何度も有衣を呼んだが、直輝が抑えつけているため、晴基は追いかけれない。

靴をはく頃には、有衣はすでに涙をこらえてはいられなかった。

玄関に、ぼたぼたと、零れた涙が染みを作る。

心の中で晴基に謝りながら、ドアを閉めると、晴基の呼ぶ声も聞こえなくなつた。

## 05 (後書き)

ちよつと波が立って、直輝と有衣の間に溝ができてしまいました。というか、直輝が勝手にキレちゃったんですけど…。

これだから、無自覚と臆病と鈍感のトリニテイ男は^^；

さて、今回お料理名は出しませんでした、チヂミでした。

ハル用には普通ので、直輝用にはキムチを入れて辛めに。

有衣は土曜日はビールに合うものを基本に作ってるんです。

なのに直輝はちつとも気づかず、こんな風にキレてしまっ…どうしようもないですね。

ドアが閉まった瞬間、張りつめていた気持ちが途切れた。

直輝は半ば茫然となり、晴基を抑えつけていた手から力を抜く。

その途端、晴基は玄関へ走り出したが、有衣はもう行ってしまったのだ。

「ぎゃああん!!」

部屋に響いたのは、およそ晴基のものとは思えない、今までに聞いたことのないような泣き声だった。

泣き声よりも、叫び声に近い。

その声に現実に取り戻された直輝は、晴基を連れ戻しに玄関に行った。

「ハル」

晴基はドアに向かって立って、泣いていた。

名前を呼ぶと、ひくり、と肩が揺れる。

晴基を抱き上げようとしゃがみこむと、下がった視線が玄関の床を捉えた。

点々とした黒い染みが、何かを悟った時、直輝の心臓は擦られたような痛みを感じた。

その痛みがあまりにも強かったので、直輝は思わず自分の左胸を押さえ込んでしまったほどだ。

けれど、自分が言ったことは間違っていない、と直輝は思い直す。痛みを忘れようと、頑なに頭を振る。

「ハル、戻ろう」

さきほどまでの、怯えた晴基を思い出した直輝は、意識して優しい声を出そうとした。

晴基は涙に濡れた目で、だが強く直輝を睨みつける。

「きらい」

その小さな口から発せられた言葉に、直輝は一瞬固まった。

今まで、一度も聞いたことのない言葉だった。

「ぼくが、パパ……。ゆいちゃんは……」

泣きながら話す晴基の言葉に、要領を得ない直輝は溜息をつく。落ち着いてからまた話を聞こう、と直輝は抵抗する晴基を抱え込んで、リビングへ連れ戻した。

夜遅くにチャイムが鳴り、ドアを開けたみどりは驚いた。

頭のとっぺんから靴まで、ずぶ濡れになった有衣が立っていたのだ。

「今日、泊めて」

「いいけど……」

みどりは慌てて有衣を中に引き入れ、バスタオルを渡す。

濡れていたのは外見だけではない、赤い目に盛りあがる水を見て、みどりは内心溜息をついた。

「清香さんに連絡した？」

「携帯、置いてきちゃった……」

今日はハウスキーパの仕事の日だったはずだ、今の有衣に、どこにとは聞けなかった。

「連絡しとくから、とりあえずお風呂入りなよ」

「ありがと」

しばらくしてお風呂場から聞こえてきた、有衣のすすり泣く声に、みどりは今度こそ溜息をもらす。

何かある度に、以前から有衣はみどりの家に泊まりに来ていた。

清香さんに心配をかけたくないのだ。

心配そうに顔を出した両親に、大丈夫だと伝えてから、みどりは清香さんに電話をした。

何かあつたらしいことに清香さんも気づき、溜息をついたのが感じられたが、ひとまず外泊の承諾を得る。

父親が早くに亡くなったせい、有衣が年上の男性に憧れることが多いのは、みどりも知っていた。

けれど、子供までいる人を本気で好きになるとは、みどりも思っていないかったのだ。

泣きながら雨に濡れて帰ってきた有衣のことを思うと、みどりは言しようのない気持ちになった。

温かいお湯につかりながら、有衣は止め処なく落ちる涙に、途方に暮れていた。

直輝が捲し立てた言葉が、もうずっと何度も頭の中で繰り返されている。

有衣は、直輝の言い分が正しいことを知っていた。

確かに自分は、“母親”になろうとしていたということを、認めている。

晴基に頼まれて、晴基を気遣って、そうなるうとしていた面は確かにある。

けれど、晴基だけを思ってそうしていたのではないことには、今日より前に既に気づいていた。

それはつまり、晴基の本当の母親に代るものになりたいと思っていた、ということだ。

晴基にとってだけでなく、直輝にとってのそれにも、なりたいたいと思っていたのだ。

だからこそ、直輝の言葉が、こんなにも痛いのだ。

まるで無数の剣で突き刺されたかのように、有衣の心は夥しい血を流している。

それが、涙になって流れているような気がした。

今の有衣は、それをとどめるすべを知らない。

ようやく涙が止まってきたころ、浴槽のお湯は、どこかぬるく感じられた。

お風呂から出てみどりの部屋に行くと、心配そうな顔が有衣へ向けられる。

「ごめんね」

「…いいから」

軽く溜息をつきながら、みどりは有衣をドレッサーの前に座らせる。そしてドライヤを取り出し、有衣の髪にかけてやった。

有衣は気持ちよさそうにみどりにまかせていたが、そのうちまた新たな涙が盛り上がる。

「深入りするな、って言われてたのにね」

ドライヤの風の音で、有衣の声はみどりにはつきりとは聞こえない。だが唇の動きは、ばかだよ、と言ったように見えた。

有衣の気持ちを想って、みどりの胸は痛んだ。

直輝は、リビングでひとりソファに背を預けて、遅々として進まない時計の針を眺めていた。

その後ろの窓に、雨が叩きつける音が聞こえている。

直輝が帰ってきたときに既に降り始めていた雨は、有衣が出て行った頃にはひどくなっていたはずだった。

いつも直輝が呼ぶタクシーも、今日はなし、有衣は傘も持っていなかった。

帰る頃には、全身がずぶ濡れになってしまったに違いない。

晴基はとうに泣き疲れて眠ったが、直輝はとても眠る気にはなれないでいる。

テーブルの上には、有衣が作った料理が冷めた食べかけのまま載っていた。

有衣が冷やしたジョッキに入ったビールも、半分以上残ったまままだきつと気が抜けて、ぬるくなっているだろう。

それを横目で見ながら、直輝は自分の言動を思い返した。

なぜ、あんな言い方をしてしまったのだろう。

腹が立ったから？　だが、自分は何にそんなに腹が立ったのか。

唯の代りに晴基の母親になると言ったことが、だろうか。

そう考えたところで、直輝は思わず呻くような声を漏らした。

唯の代りにだつて？ 有衣は、そんなことは一言も言わなかった。

有衣はただ、晴基の母親代わりになる、と言っただけだった。

つまり、有衣を唯の代りにするというのは、自分が考えていたことなのだ。

自分が無意識に思っていたことを言われて、凶星を指されたような気になって、怒りを感じたのだ。

直輝は、思い当たったその理由に、心臓が押しつぶされたような衝撃を受けた。

「…ばかな」

口を衝いて出た言葉が、空々しく聞こえて、直輝は頭を抱えた。

あのととき、直輝は有衣の手を晴基から乱暴に引き剥がし、怒りをそのまま言葉でぶつけた。

それを思い出すと、そのときの有衣の表情の記憶がありありと浮かんだ。

目を睜つた後、すぐに俯いてしまった有衣は、口を固く引き結んでいたのだ。

多分、涙をこらえていたのだ、と今ならわかる。

玄関にできた染みは、こらえきれないで落ちたものたちなのだ。

それを見たときに感じた胸の痛みが、また直輝を襲う。

自分のしてしまったことの大きさに打ちのめされて、直輝は重たい溜息を吐きだした。

髪を乾かし終えて、有衣とみどりはベッドに入った。

みどりのベッドは大きい。

それは、みどりの快適さのためというよりも、時折こうして有衣が泊りに来た時のためだった。

だからみどりのベッドは、小さなころからかなり大きなものだった。そのベッドに、ふたりで並んで横になる。

そしてみどりは、いつも有衣が話し出すのを辛抱強く待つのだ。

しばらく経ってから有衣は、ぼつりぼつり、と話し始める。

始めから、直輝のことが気になっていたこと。

晴基がとてもかわいかったこと。

晴基のさみしさを、自分はよくわかってあげられると思ったこと。

晴基が交換条件のように、パパやママになることを無邪気に約束してくれたとき、嬉しかったこと。

戸惑いながらも、晴基の“母親”を演じるのは楽しかったこと。

晴基と直輝と過ごした夜の時間帯は、あたたかかったこと。

いつの間にか、本当に代りになりたいと思っていたこと。けれど、直輝に言われた言葉。

「私って、バカだよ。ムリに決まってるのに……」

話しながらまた泣いてしまった有衣は、ひしゃげた顔になりながらも、なんとか笑おうとした。

みどりは、何も言葉を見出せず、ただそっと有衣を抱きしめてやった。

隣でようやく眠りについた有衣を確認して、みどりはそっとベッドから下りた。

部屋を抜け出し、下の階のリビングルームまで行くと、みどりは携帯を取り出す。

既に日付は変わり、深夜とっていい時間帯だったが、みどりは頓着しなかった。

有衣の姿に胸を痛めると同時に、清香さんの事務所で一度見たことのある相手の男に怒りを感じていたのだ。

有衣をあれほど傷つけておいて、まともな神経の人間なら、すぐに眠れるはずはない、とも思っていた。

もっとも、眠っているとしても、起こしてやるとは思っていたが。みどりは、出ないだろうとは思いつつ、有衣の携帯をコールした。

突然、けたたましい音がすぐ傍で鳴り響き、直輝は驚いてその音源を凝視した。

直輝の座るソファの隅に、何度も目にしたことのある有衣の携帯が置きっぱなしになっていた。

有衣のその忘れものに、今初めて気づいた。

有衣は、取りに来るだろうか。

僅かに期待を抱いている自分自身を自嘲しつつ、きっと有衣は来ないだろう、とも予想した。

逡巡している間に、呼び出し音は途切れる。だが、間をおかずにまた鳴り出す。

勝手に出るわけにはいかないが、いつまでも鳴るままにしておくわけにもいかない。

直輝は、そつと携帯を手の中に引き入れると、電源を落とした。

単なる機械にすぎないのに、直輝は無意識に、それに有衣のぬくもりを探していた。

## 06 (後書き)

同時進行ぼく、ちゃんと書きたかったのですが。場面の変遷がちゃんと伝わってるでしょうか…。なんか、微妙な感じになってしまいました…。

とりあえず、直輝は自覚しました。

でも、その自覚をどう生かせるかな…みたいな^^；

そんな感じで、溝が埋まるのもう少し先のような気がしますね。

そして、今回ほぼ新キャラ。

幼馴染みのみどりの参戦です。いつでも有衣の強い味方です。

でも、いくら怒っても夜中に悪戯電話は、ほんとはダメですよ〜

部屋がだんだん明るくなり、窓から差し込んできた朝日に、直輝は顔を顰める。

結局一睡もできないまま、日曜の朝を迎えることになってしまった。あの後、ベッドに入ったことは入ったのだが、眠れるはずもない。手放すことのできなかった、電源を落とした有衣の携帯が枕元にある。

夜の間中、ずっとそれを眺めていた。

それが、無かったことにしたいという思いを絶対的に否定し、昨日の出来事の証拠として主張していた。

直輝は、気が進まないまま、それでも日常を送ろうとした。

まだ眠る晴基をそのままに、キッチンへ向かい簡単な朝食を作る。これまで日曜はいつもそうしてきたが、今日はいつもよりもさらに部屋の中がひっそりと静まっている。

テーブルの上に皿を置いた音が、やけに響くような気がして、直輝の気分はさらに落ち込んだ。

時計の針は7時を回ったところだ。

いつもなら晴基はとうに起き上がっている頃である。

ベッドルームに戻ると、晴基はまださきほどの姿勢のまま横になっていた。

起こそうかどうか迷いつつ顔を覗きこむと、不自然なほどにぎゅつと目を瞑っている。

よく見ると、全身に力が入っているのか、手足もぎゅつと丸くなっていた。

寝たふりだ、と直輝にもわかったが、どうしていいかわからない。咄嗟に、こんなときに有衣がいたら、と思ったが、それが望めない

ことは直輝自身よくわかっている。

しかも、晴基がこんなことをしているのは、昨日の出来事のせいだと簡単に推測でき、溜息が出る。

どうにかしなくては、と思ったが、出て来たのは月並みの言葉だけだった。

「ハル、ごはんできたぞ」

晴基は寝たふりがばれているとわかると、無駄な努力をやめた。

すぐに起き上がったので、直輝は安堵したが、その安堵は次の瞬間裏切られた。

「ぼく、ごはんたべない」

食欲がないのか、と心配したが、そうではないらしい。

ベッドから下りた晴基は、キッチンへ走り、お菓子の入った缶を手にもた戻ってきた。

その缶は、有衣との買物の際に買ったものの、ほとんど食べられることなく残っていたお菓子が入っている。

ハNSTだ。

これは晴基の考えた、精いっぱい直輝に対する反抗なのだ。

直輝はそれに気づき、またしても気分が降下していくのを感じた。

解決策のわからないまま晴基と一緒にいるのが苦痛にさえ思え、直輝は一旦書斎に避難した。

書斎にあるのは、医学書だらけの本棚と、大きめのデスクとPCだけだ。

誰も入ってこない空間で、直輝はようやく自分を取り戻せると思っただが、それは思い違いだった。

デスクの上には、以前唯と取った写真の入った写真立てが飾られている。

それが目に入った途端、直輝は内側から自分でもわからない何かの沸き上がるのを感じた。

笑顔で写っているはずの唯の目が、自分を責めているように感じる。

唯から心を移したことも、有衣にした仕打ちのことも、直輝にひどい罪悪感を感じさせた。

直輝は痛む目頭を押さえ、思わず写真立てを伏せてしまった。そんなことをしたのは初めてだったが、今のこの姿を、誰にも、特に唯には見られたくないと思ったのだ。

お昼を過ぎた頃、部屋の外で物音がしたのに気づき、直輝は書斎を出た。

精いっぱい反抗に力尽きたらしい晴基が、テーブルに着いて置きつ放しだった冷めた朝食を口にしていた。

書斎から出てきた直輝を見て、晴基は一瞬迷ったが、空腹に負けてそのまま食べる。

缶の中に入っていたのが、腹の足しにならない小さなラムネやキャンディばかりだったからだろう。

直輝は、少しだけ胸の中に温かいものが広がったのがわかった。

昨日晴基が泣きながら訴えていたことが何だったのか、ようやく聞いてあげられる。

食べ終わるのを待つて、直輝は晴基の言葉を促した。

「ゆいちゃんは、わるくないの。ぼくが、ゆったの。」

ぼくが、ゆいちゃんのパパになってあげるから、ゆいちゃんは、ぼくのママになってね、って」

「有衣ちゃんのパパ？」

「うん。ゆいちゃんね、パパがしゃしんだけなの。」

ぼくは、パパがいるのに、ゆいちゃんはいなくてかわいそうね、ってゆったら、やさしいってゆってくれて。

やさしかったら、ゆいちゃんがうれしいうから、だから、ぼくがパパになってあげることにしたの」

「それでハルが、代わりにママになってほしいって、お願いしたのか？」

「そうなの。でも、ぼく、やくそくまもらなかったの」

「約束？」

「ほんとうはね、パパにはないしょだったの」

「内緒……」

「ゆいちゃんは、さいしょは、うん、ってゆってくれなくてね。ぼくが、いっぱいお願いしたの。」

そしたら、パパがかなしくなるから、パパにはないしょだって、ゆいちゃんがゆったの。

ないしょにしてたら、ぼくがおねがいしたら、ママになってくれるって、ゆったの」

直輝は、一生懸命話す晴基の言葉を、自分で組み立て直した。

つまり、こういうことだ。

まず、有衣には父親がいない。

晴基は（意味はわかっていないだろうが）自分が父親になるから、代わりに母親になってほしいとお願いした。

有衣は、直輝の気持ちを考えて、最初は断ろうとした。

だが晴基があまりに強く言うので、有衣は直輝には知られないように、晴基のために願いを聞き入れた。

「そう、だったのか……」

新たに知った事実は、直輝を余計に落ち込ませるものだった。

有衣が事実を一部しか告げておらず、そして有衣の行動が晴基と直輝双方のためだったとようやく気づいた。

自分が有衣に投げつけた言葉がいかにも理不尽なものだったか、思い到り直輝は項垂れる。

「パパ、かなしかったの？」

「え……？」

直輝は、そうではない、と心の中で否定した。

有衣の言動によって、自分の内面が暴かれるのを恐れたのだ。それを覆い隠すために、怒りが先立ちひどい言葉をぶつけた。

「ゆいちゃん、パパがかなしくなるってゆってた。だから、ゆいちゃんのことおこったの？」

ぼくが、やくそくまもらなかったから。ぼくが、いけなかったの？だからパパがおこって、ゆいちゃんは、いなく、なっちゃったの？ もう、こないの？」

直輝に対して感じていた怒りは、一転して自分を責める感情になってしまったらしい。

自分が約束を守らなかったために、直輝が有衣を怒り、有衣がいなくなってしまうのだ、と知っている。

直輝は、自分の言動が有衣も晴基も傷つけたのだと、今更ながら再び思い知った。

「…ハル、ごめんな」

涙を溢しながら、不安げに自分を見上げる晴基を、直輝はそっと抱きしめる。

そのぬくもりに、直輝は勇気を与えてもらった気がした。

「パパが悪かったんだ。ハルのせいじゃない」

「…ほんと？」

「ああ。ほんとに、ごめんな。…許してくれるか？」

「うん。ゆいちゃんにも、あやまる？」

晴基の問いは、無垢なだけに直輝の心に刺さり、なけなしの勇気が萎みかかる。

直輝はどうにか、そうだな、とだけ言うために声を絞り出した。

晴基を寝かしつけた後、直輝は疲れた体をベッドに横たえた。

今日一日で、まるで一週間分の疲労が蓄積されたような気分だった。枕元に置いてある有衣の携帯を、改めて見つめる。

どうしたら、有衣に会って、謝ることができるだろうか。

有衣とは、この部屋でのみの関わりしか持っていなかったため、あとの繋がりは会社だけである。

いずれにしろ明日まで待つしかないということだが、それはもう仕

方のないことだ。

2日続けて完徹するわけにもいかず、直輝は考えることを諦め、無理矢理意識を沈めこませた。

朝一番に、電話をかけようと思っていた直輝だったが、電話は逆に西岡家へかかってきた。

それはもちろん有衣からではなく、しかしどういいうわけか社長から直接かかってきた。

「担当の川名なんですが、少しの間お休みをいただきたいと思いついて」

直輝は、原因がわかっているだけに、頷くしかなかった。

しかし“少しの間”がどれほどの期間なのか、あるいはこのまま来なくなってしまうのかと、不安が襲う。

「それで、代わりの者についてなんですけれども」

「いえ、代わりの方は結構です」  
咄嗟に、そう答えていた。現実的に考えれば、この答えはあり得ない。

直輝自身驚いたのと同様、電話の向こうでも驚いたような空気が流れるのがわかった。

「ですが、……お困りになるのでは？」

言葉を選んだ、とわかるような間だった。

もしかして、有衣は事情を話したのではないか、と直輝は思った。

しかしそれならそれでいい、こちらの思いがわかるように、答えればいいだけだ。

「そうですね。ですが、今後も是非、ゆ……いえ、川名さんにお願いでければ、と思っっているんです」

「……そうですね。では、……もう一度、川名へ確認いたしました、またお電話させていただきます」

躊躇いがちな返答の後、電話は切れた。

狡いやり方だとは、思った。

それでも、このまま代りの誰かを宛がわれて有衣と会えないままになるのは、どうしても避けたい。

有衣を待って、もしも来なければ、携帯を持って会いに行けばよいのだ。

直輝はそう思い、ようやく自分を取り戻せそうな気がしていた。

しかし、その顔色を見れば、本人がそう思うほど成功しているとは言い難かった。

## 07 (後書き)

“直輝際限なく落ち込む”の巻でした。

最後、ちよつと強気な発想をした直輝ですが、実は内心びくびくしているのです^^;

だって、有衣が戻るとは、限りませんもんね。

そして電話の社長がまさか有衣のママンだとは、思いもしない直輝なりました。

日曜の夜遅く帰ってきた娘の姿を見たとき、選択を誤ったと清香は後悔した。

有衣が恋をしたと気づいた時に、あるいは最初から、有衣を西岡家に行かせるべきではなかった。

配偶者と離別ではなく死別した人間に恋慕する危険は、清香が一番理解している。

清香自身夫と死別し、自分にある種の頑なさがあるとわかっているからだ。

有衣が恋をした相手 西岡 直輝が、ある意味清香と同じ種類の人間だろうということは、想像に難くない。

有衣は詳細を語るうとはしなかったが、大方の予想はついた。

かわいそうに思ったが、直輝とはビジネスとしての関わりがあり、清香は感情のバランスを取ろうと奮闘した。

複雑な気持ちで電話をかけたが、直輝は有衣の継続を希望した。

帰るなり、もう西岡家には行けないと思う、と言った有衣を思い浮かべ、清香は溜息をついた。

どうやら娘は、少々厄介な男に落ちてしまったようだ、と。

しかし一方では、娘に揺さぶられているらしい直輝に、同情めいた気持ち湧かないでもなかった。

失った存在から心をほかへ移すことも、それを自分で認めることも、かなりのエネルギーが必要なのだ。

「若いつて、いいわねえ……」

年寄りと言うにはまだ早すぎる清香だが、自分にはそんなエネルギーはもう無いわ、とひとりごちた。

継続を希望された、と聞いて有衣は戸惑った。

今もまだ、最後別れ際に言われた直輝の言葉が、耳元でわんわんと

鳴り響いているのだ。

それなのに、直輝は自分がいいと言ったという。

直輝がどういうつもりでそんな要望を出したのか、有衣には全くわけがわからない。

また行ってもいいのだ、ということに、嬉しさはあったが、今はただ、不安のほうが大きい。

“少しの間”休むことが許可されたため、有衣は自分の部屋で悶々とすることになった。

時間が遅く感じる。

繰返し時計を見てしまい、先ほどからたったの10分しか進んでいないのを見て、有衣はどっと疲れを覚えた。

有衣は元の日常に戻っただけだったが、既にそれは日常ではなくなっってしまったている。

月曜、火曜と、学校から戻って家事に明け暮れてみたが、時計が気になり、晴基や直輝のことが気になる。

今頃本当なら晴基と一緒に買い物をしていたとか、一緒にお風呂に入っていたとか。

あともうすぐで直輝が帰ってくる頃だとか、今日の夕食はどうしただろうとかとか。

晴基は、直輝も、同じように自分を気にしてくれているだろうとか、とか。

結局いつもふたりのことを考えてしまう自分のことを、有衣は自分でもどうにもできずにいた。

学校にいる時ですら、ふたりのことが頭から離れなくなり、有衣は疲れきってしまった。

それを横で見えていたみどりも、有衣の心情を思いやると苦しい。

みどりは、有衣にはあの日電話をかけたことを話していなかった。

けれど、電源が落ちたのは、人為的なもの。つまり、直輝が落とし

たのだとわかっていた。

それは有衣にとつて有利に働きそうなことだと思ったが、うかつには言えないと思っていた。

「有衣、気分転換したほうがいいと思う」

「…そうだよな」

そうは言うものの、お互い何をすれば気分を変えられるのかはわからないでいた。

ひとまず、鬱々とした気分を少しでも晴らそうと、昼休みになると有衣は屋上へ向かった。

通常屋上は立入り禁止なのだが、鍵が壊れているため、事実上解禁されている。

それでも見つかりと怒られることも多く、有衣は辺りを窺いつつ向かい、ドアを開けた。

見つかりにくい貯水タンクの裏側へと行くと、先客がいる。

有衣の足音に気づいて向けられた顔を見て、有衣は驚愕した。

「あ…!?!」

「…は、ハルママ!?!」

「た、武先生?」

お互い、無様にも口をあぐり開けたまま、しばらく見つめあう。なんでここに、とお互いが思い、視線は名札へ、そしてその後足もとへ集中した。

有衣は、武 譲(たけ ゆずる)という名札を見た後、上履きのラインが黄色いの気づいた。

黄色いラインは2年生の印だ。

ちなみに、3年生の有衣の上履きのラインは青色である。

「年下!?!」

「高校生だったのか…」

「てか、それでなんで先生?」

「え、あの保育園、俺ん家だし…」

有衣にしてみれば、いくら若く見えたと言っても、仮にも“先生”が年下だとはまさか思わない。

譲にしても、いつも園で会うときは私服だったせいで、まさか高校生だとは思っていなかった。

何とも言えない微妙な空気が流れたが、譲が促して有衣はおずおずと隣に腰を下ろした。

「…具合が悪かったんじゃないんだ」

「え？」

「昨日、一昨日と、ハルパパが遅くに迎えに来てたから。」

ハルママが具合悪いのかと思ってたけど。…とりあえず体は元気そうだね」

有衣の表情が、あまりにも辛そうに変化したのを見て、泣いてしまっているのではないかと、譲はぎくりとした。

けれど有衣は泣きはしなかった。代わりに、少し哀しそうに笑う。

「私、ハルくんのママなんかじゃ、ないよ」

「え？ でも、ハルが…」

「私は、ただのハウスキーパだから」

まるで、言い聞かせているかのようだ、と譲は思う。

少なくとも、晴基や直輝の見方は違うだろう、と思った譲は、余計なことだと知りつつ口を出したくなる。

譲が見たところ、この2日間の晴基の表情は暗く、直輝の顔色も相当悪い。

有衣の顔色も冴えないところを見ると、何かがあったのは間違いないのだ、それも恐らく直輝と有衣とで。

それでも、それを直接聞くほどには親しくないため、譲は回りくどい質問をした。

「ハルの様子、気にならない？」

「…元気にしてる？」

「全然」

有衣は、弁当を広げていた手をぴたりと止めた。

一瞬譲がふざけているのかと思ったのだが、顔を見上げてみると、  
そうでもないらしいことがわかった。

「具合悪いの？」

「体は元気。でも表情とか仕草とか、暗い感じでいつもと全然違  
よ」

有衣の知っている晴基は、いつも笑顔で、暗い顔など見たことがな  
い。

今、そんな風に暗い顔をさせているのは、自分なのだろうか、と思  
うと有衣は胸が潰れそうに痛んだ。

そして同時に、直輝の様子も気になってしまふ自分には、半ば飽き  
飽きしてしまふ。

「それにハルパパも相当顔色悪いな。まともに寝てないって感じで  
さ」

譲が直輝についても話したため、有衣は自分の気持ちが見透かされ  
たのではないかと、どきりとした。

そっと譲を窺ってみたが、よくわからなかった。

譲の話聞いた後、ここ2日間頭から離れなかったことが、さらに  
こびりついたような気がする。

どうしても、何をしても、ふたりのことを考えてしまふ自分が  
いる。

考えまいと躍起になるのに、そうすればするほどさらに考え込んで  
しまふのだ。

直輝が有衣の継続を希望したということは、有衣が行きさえすれば、  
有衣は受け入れてもらえるのだろう。

だが今のところ、有衣の中ではまだ踏ん切りがつかないでいた。

「今日も迎えに来ないつもりなの？」

「……まだ、わからない」

「俺としては、ハルのためと思って、迎えに来てほしいけどね」

「ハルくんのため？」

「何があつたかは知らないけどさ、どうせハルはとぼっちり食ってるんだろ」

何も言い返せず、有衣はぐつと息が詰まった。

確かに、晴基は何も悪くないのだ。

いわゆる“大人の事情”のために、忙しい直輝を待つて晴基は遅くまで保育園で過ごしている。

黙つた有衣の態度を、肯定と勝手に解釈した譲は、話は終わったとばかりに立ちあがった。

「じゃ、待つてるから」

ひらひらと手を振つて、譲は屋上を後にした。

有衣は、その後ろ姿を見つめながら、表面上は、まだ決めかねているふりをしていた。

けれど脳内では既に、今日の放課後の予定を組み立て直している。

自分の浮つき始めた気持ちに気づいた有衣は、これは晴基のためだと誰に対してか一生懸命言い訳した。

有衣は家に帰つて急いで服を着替えると、会社に向かった。

もう行けないと思つていたため、西岡家の鍵は会社に預けていたのだ。

「清香さん、鍵ちょうだい」

「…もう、お休みはいいの？ 復帰したら、もう休めないと思うわよ」

「うん、いいの。…ハルくんのために、行くことにしたの」

「そう…？ まあ、有衣がいいなら私は何も言わないわ」

鍵を受け取ると、振り返りもせず事務所から出ていく有衣の背中に、清香は苦笑交じりのまなざしを向けた。

「言い訳なんてしちゃつて、…ばかな子」

有衣が行くと言つたら、止めることはできない。

清香は小さく溜息をつきながら、直輝の職場の電話番号をダイヤルする。

今夜から有衣が行くと伝えると、あからさまにほっとした雰囲気を感じ、清香はまたしても苦笑を禁じ得ない。

どうやら有衣には追い風のような、と清香は電話が切れるとこっそりとほほ笑んだ。

母親としては、有衣にはできるなら辛いものを含む恋愛はしてほしくない、と思う。

それでも、どうしても振りきれない思いがあるなら、それを貫いてほしいと思う。

またしても、若さを羨ましいと思いかけて、最近このパターンが多いな、と清香は少しだけ慌てた。

## 08 (後書き)

今回はなぜか、清香さんで始まり清香さんで終わりました。特に深い意味はなかったんですが、そうになりました。

そして、武先生は高校生でした。

しかも有衣と同じ学校で、年下です。

この設定は、使おうかどうか、どうしようかな〜という程度で考えてたものですが、

有衣を動かすのに一番いいキャラは譲かなあ、と思い使うことにしました。

次回は、有衣と晴基&直輝再会です。

でもまだまだ安心はできません？^^；

保育園に向かう間、有衣はずっと手の中のカードキーを眺めていた。直輝の家から飛び出した時は、もう二度と使うことができない、と思っていた。

それなのに、3日だけ開けて、今日はもう使おうとしていると思うと、何やらおかしい。

直輝の意図はわからないままで、不安な気持ちのほうが大きいが、それでも自然に笑みが浮かんだ。

インタフォンに出たのは、譲だった。

「ハルがお待ちかねだよ」

譲の後ろで、有衣の名前を呼ぶ晴基の興奮した声が聞こえる。

その音が耳に届くと、有衣は緊張で強張っていた体から力が抜けるのを感じた。

「ゆいちゃん!!」

大きな声で名前を呼んで、走り寄ってきた晴基は、そのまま有衣に抱きつく。

あまりの勢いに、有衣は後ろへ倒れそうになったが、なんとか持ち堪えた。

そのまま抱き返してあげると、晴基は嬉しそうに笑う。

「ハルくん。…久しぶりだね」

「うん！ ひさしぶりだね！」

明るい声が、嬉しい。

目の前にいる晴基が現実だと確かめたくて、有衣はもう一度ぎゅっと晴基を抱きしめる。

そんな有衣と晴基を、譲はほっとしたように見つめた。

有衣は、ここにまた来られるよう背中を押してくれた譲を見上げる。制服を脱いだ分、学校で会ったときとはやはり雰囲気少し違う、

とお互い思った。

「あの、ありがとう、…武、先生」

年下だと知ってしまったせいで、先生なのだが先生と言うのを一瞬戸惑ってしまう。

変な間ができてしまった、と焦る有衣を、譲は笑った。

「好きに呼んでかまわないよ。つか、俺もため口きいてるし」

「じゃあ、譲くん？」

晴基の影響か、有衣は咄嗟に苗字で無く名前を言ってしまった。

一瞬焦りを覚えたが、譲は特に気にする風でもなく、それを受け入れる。

今までとは異なる雰囲気であわされたそんなやりとりを、晴基は怪訝そうに見つめた。

「たけせんせい、ゆいちゃんとなかよしなの？」

「んー？ そうだなあ。まだ、お友達かな」

「まだ、って何…」

「だめ！ ゆいちゃんはぼくの！ あと、パパの！」

聞き捨てならない言葉に反応しかけた有衣だが、晴基の反応のほうが強烈だった。

深い意味はないとわかっていても、後半の言葉にはなぜかどきりとさせられた。

黙ってしまった有衣をちらりと見つつ、譲は晴基に仕方なさそうに笑いながら有衣を譲るふりをする。

それで安心したらしい晴基に引つ張られるように、有衣は譲に挨拶して園を後にした。

実際会えなかったのはわずか数日なのに、もうずいぶん経ったように感じる。

そのせいか、何もかもが懐かしくて、嬉しい。

晴基と手をつないで、いつもの道を一緒に歩くことだけでも、楽しくて有衣はずっと笑顔だった。

いつものスーパーに行くと、顔なじみになっていた店員が近づいてくる。

「しばらくですね。具合でも悪かった？」

「あ、はい…少し」

ぎこちなく返事を返す有衣を見て、晴基は少しだけ表情を硬くした。有衣はそんな晴基には気づかなかったが、とにかく早く店を出たくなってしまった。

すっかり忘れていたが、ここでは親子だと誤って認識されていたのだ。

以前感じていた戸惑いとともに、直輝と最後に会った晩の出来事をまた思い出し、有衣は泣きたくなかった。

一秒でも早く、と手早く買い物済ませ、足早に店を後にする。

「ゆい、ちゃん」

「あ、ごめんね、歩くの速過ぎたよね」

息の上がった晴基の声に、小走りになっていた晴基の状態に気づき、有衣は慌てて歩幅を縮めた。

その頃には、マンションがもう目の前に見えており、有衣はいったん足を止める。

有衣は、初めて来たときのように、少しだけ圧倒されるような面持ちで建物を見上げる。

有衣の心には、戻ってこれたのだという安堵と、戻ってきてしまったのだという不安が緋い交ぜになっていた。

玄関に入り靴を脱ぐと、晴基が有衣の服を引っ張った。

有衣が晴基を見ると、どこか表情に影が差しているように思えて、有衣は少し不安になる。

どうしたのだろう、と思ったが、晴基の口元は強張っていて、なかなか話そうとしない。

晴基の目線に合わせて、有衣が廊下にしゃがむと、晴基はようやく口を開いた。

「…ゆいちゃん、ごめんなさい」

「うん？ 何が、ごめんなさい？」

「やくそくまもらなくて。それで、ゆいちゃんが、パパにおこられたの」

あの晩のことを言っているのだと、わかった。

晴基に何も言えずに部屋を飛び出したせいで、晴基が気に病んだのだと、有衣の胸は痛む。

「…ハルくんのせいじゃないよ。私が、悪かったの」

「でも、ぼくが…。ごめんなさい」

ぎゅっと目をつぶると、ぽろっと涙が零れ落ちた。

食いしばろうとした齒の間から、小さな泣き声が漏れる。

有衣は晴基をぎゅっと抱き寄せると、左手で頭を撫で、右手で背中を撫でてやる。

「ハルくん。いっぱい心配してくれたんだね、ありがとうね。」

でもね、ハルくんのせいなんかじゃないからね。だから、大丈夫だよ」

「じゃあ、またいなくなるなら？ ずっといてくれる？」

「…ずっといるよ。いなくなるならいよ」

そう、自分は晴基のために来たのだ、と有衣は改めて思う。

またあのようなことにならないように、晴基のためだけを思っここに来ればいい。

直輝の意図もわからない今、直輝のことはできるだけ気にしないようにしよう、と、有衣は思った。

今日の晴基は寝つきが悪く、何度も有衣がいることを確認しようとした。

有衣はそんな晴基がかわいそうで、その度にずっといると約束し、ようやく晴基が寝入ると溜息をこぼした。

もしかしたら、自分の緊張が晴基に伝わってしまっていたのではないかと思う。

ベッドルームに入った途端、いつも感じていたあの不可解な緊張感がぶり返したのだ。

そのため有衣は、自分がここにいるのは晴基のためなのだと、頭の中で繰返し念じる必要があった。

しかし、その抵抗は空しく乏しいものだど、すぐに痛感する。

有衣が視線を巡らすとすぐに直輝のベッドがあり、しかもその枕元に自分の携帯電話を見つけてしまったのだ。

その瞬間、有衣の心臓は早鐘のように打ち始める。

記憶の中では、確かりビングがキッチンに置いていたはずなのだ。

それなのに、どうしてベッドルームに、まして直輝のベッドの上にあるのか。

答えなど出るはずもなく、有衣はふらりと立ち上がり、自分の携帯をその震える指でそっと掴みあげた。

その瞬間、ほんの一瞬だけ触れてしまったベッドカバーの感触に、有衣の全身が静かに震える。

感じるはずのない直輝のぬくもりを探したくなってしまい、有衣はやっとのことで自分を抑える。

こんなことではいけない、と思うのに、またしても思い通りにならない感情に、有衣は途方に暮れた。

ロックの解除された電子音に、有衣はびくりと体を竦ませる。

それなのにドアの開く音がすれば、条件反射のように有衣は玄関へ向かってしまった。

「…おかえりなさい」

「…ただいま」

お互いの口から出たのは、それぞれが思っていたよりも、幾分ぎこちない音だった。

それでも、想像よりも穏やかな雰囲気を感じて、有衣はひどくほっとした。

それと同時に、自分の感情との闘いに勝てる気がせず、ひどく哀し

い気持ちになる。

もっと何か言わなければ、と思ったがうまく言葉に出せない気がして、有衣はリビングへ戻った。

直輝の夕食の準備は整っているし、お風呂もできあがっている。

晴基も眠り、その他の仕事も終え、自分自身の帰り支度も既に終わっている。

有衣は、やはり帰ってくる前に全てを終わらせておいて正解だったと思った。

お決まりのようなぎこちない挨拶をした後、リビングへ歩く有衣に、直輝は安堵を覚えていた。

なんとか謝ることができそうだと、と内心で改めて覚悟を決めようとしていた。

しかし、リビングへ到達した有衣は、床にあった自身の荷物を取ると、すぐに引き返そうとこちらを向く。

「あの、食事もうできてますし、お風呂も大丈夫です。

ハルくんももう眠ってます。掃除と洗濯もひと通りやりました。

じゃあ、あの…また明日来ますので。今日はもうこれで失礼します」

直輝が何も言えない間に、かなり早口でそれだけのことを言って有衣は直輝の横をすり抜けていく。

「有衣ちゃん…」

とっさに呼びとめようとした声は、自分でも驚くほど掠れていた。

有衣は顔を直輝に向けたが、靴を履く動作は止めようとしなかった。

それも、心なしか急いでいるような雰囲気を感じられる。

どうあっても帰るつもりらしい、とわかると、直輝はもう何も言いだせなくなってしまった。

「…タクシー」

「いえ、…ひとりで帰れます」

「そう…」

力無く返した言葉が、虚しく廊下に響く。

有衣は、既に完全に靴を履いてしまい、ドアを半分開けてしまっている。

「あの、おやすみなさい……」

「……おやすみ」

情けない自分の声の後に、ドアのしまる音が響いた。

直輝は、全く期待に副わないこの再会に、茫然と閉まった玄関のドアを見つめることしかできないでいた。

## 09 (後書き)

と、いうわけで再会編でした。

有衣にもいろいろ思うところがあるわけですが、ハルには普通に接しますが、直輝にはもう普通にはできない…と思っ  
っているようです。

直輝は、ガンン!!…ってところですかね^^;

じれったいふたりですが、もうしばらく見守ってください

電車に揺られながら、有衣は自分の携帯をいじっていた。

落ちていた電源は、自然に電池が切れたのだと思っていたが、電源を入れてみると電池はまだ満タンだった。

残っている着信履歴は、全部あの日の夜中のもので、みどりが大量に電話をかけたことを物語っている。

有衣自身は、自分の直輝に対する感情と晴基に対する不用意な言動が悪かったのだと思っている。

だが事情を全ては知らない優しいが激情家の幼馴染みは、自分の惨状を見て怒ったのに違いない。

だから、有衣が直輝の家に携帯を忘れたことに気づいて、わざとかけ続けたのだろう。

そのときはまだ電源が入っており、恐らく鳴りやまないために、直輝が電源を落としたのだろうと予想がついた。

直輝のベッドに置かれていた携帯。

あの日、夜中まで眠らずにいた直輝。

今日有衣を呼びとめた、掠れた呼び声。

それらが何を意味するのか、有衣にはわからなかい。

そして、自分に都合のいいように考えてしまいそうな自分が、正直怖かった。

そんなことをしてしまえば、またあの晩のようなことになりかねないのだ。

直輝のことを考えまいと、有衣は降りる駅までの間ずっと無意味にネットサーフィンを続けた。

避けられている、という事実は、有衣の復帰で浮上しかけていた直輝の気分をまた急降下させた。

有衣が帰った後ベッドルームに入った直輝は、枕元に置いてあった

携帯が持ち帰られたのに気づいた。

もともと有衣のものなのだから、それは当然のことなのだが、どこか心もとなさを感じた。

有衣の態度は翌日も変わらず、直輝が部屋に帰ると同時に、有衣が部屋を後にする。

直輝は何も言えないまま、相変わらず玄関のドアを見つめるはめになった。

テーブルの上には、温められたばかりの料理が載っている。

湯気が立ち昇るのを目にしながら、直輝はなぜか、温かさを感じられなかった。

力無く椅子に座り箸をつけるのだが、あれだけうまいと思っていたものが、今は砂を噛むように味がしない。

違うのは、一緒にテーブルに着いて、いろいろな話をしてくれていた有衣が、今はいないということだけなのに。

視界がやけに開けていて、いつもと変わらないはずの部屋の広さが、もっと広く感じる。

有衣がこの家に来る前までの日常は、直輝にとっても既に日常ではなくなっていた。

「先生、大丈夫かね？」

左方向から急に聞こえた声に、直輝ははっと意識を戻した。

一瞬、直輝は自分がどこにいるのかを認識するために、視線を素早く巡らせる。

カルテの広がるコンピュータのディスプレイと、座る馴染みの患者のヨシさんが目に入り、直輝は慌てた。

「あ、すみません。ええと…、検査の結果でしたよね」

「それはもう聞いたから、あとは薬のことだけ…。今日は先生のほうが具合悪そうだねえ」

「は…、すみません」

よくディスプレイを見れば、確かに処方箋を入力し始めたところで

止まっている。

勤務中に、しかも患者の目の前で、こんな呆けたことになってしま  
うとは、と直輝は慌てて入力を再開する。

「タケプロンは、8週目なので今回で最後ですね。あとはいつもの  
消化剤お出ししておきます。」

何か異常があったら、また診察に来ていただいでけっこうですの  
で」

「ありがとうございます。：先生も診察してもらったほうがよさ  
そうだけどねえ」

「：お大事に」

患者がヨシさんで、まだよかった。

診察室から出ていく際の言葉に苦笑しながら送り出すと、後ろから  
冷気を感じて直輝は振り向く。

看護師である白井（しろい）の、失態を責める冷たい視線に、直輝  
は益々苦笑を深める羽目になった。

「ごめんね」

「私に謝られても…。というか、先生最近変ですよ。」

近頃急にウキウキしだしたかと思っただら、ここ1週間くらいは  
逆に葬式かって雰囲気だ」

「はは、そうか…」

個人経営の病院であり、加えて経営陣の性格のせいか、ここでは看  
護士も医師もほぼ対等に渡り合っている。

しかも白井は直輝より7つも下なのだが、正直な性格の故なのか、  
歯に衣着せぬ物言いが特徴である。

例にもれず今回もぐさりと来るような言葉を言われ、直輝は渴いた  
笑いを漏らした。

気を取り直して次の患者のカルテナンバを見ようとすると、白井が  
横からそれを搔っ攫う。

「先生の担当の患者さんじゃありませんから、お隣に回します。」

患者さんに心配されるような顔が直るまで、休憩でもしててくだ

さい」

口調はきついのだが、その目の奥に微かに心配そうな気配を感じて、直輝は素直に従い、診察室を出た。

確かに、患者に心配されるようではお終いだ。

しかし、自分はそこまでわかりやすい性格だったか、と思い直輝は首を傾げた。

唯が亡くなって以来、その必要性もなかったのだが、あまり感情を動かされたりはしなくなっていたはずだ。

それでも、最近の気分の激しい変動は、自分でもわかってはいる。

有衣のこと、自分の気持ち、そして唯のことで、直輝の内面は混乱と無秩序に陥っている。

そして白井の言う“近頃”というのが、恐らく有衣が来始めてからだろう、というのは容易に考えられた。

「はは…」

思わず、自分で自分を笑ってしまった。

結局のところ、始めから有衣に惹かれていたのだ、と再認識してしまったのだ。

ちょうど屋上のドアを開け、目に飛び込んできた鮮やかな青と白を言い訳に、直輝はぎゅっと目を瞑った。

直輝の気分とは裏腹に、すっきりと雲ひとつない青空が広がり、真っ白なシャツが風に揺られている。

シャツの波間をくぐるように、直輝は歩を進め、フェンスのそばまで行く。

白衣のポケットに手を突っ込み、額をフェンスに預けて眼下を覗くと、その隙間から落ちていきそうな気になる。

「ここで自殺なんて、やめてくれよ」

突然、後ろから笑いを含んだ声が聞こえてきて、直輝は振り返った。立っていたのは、院長の甥にして次期院長と名高い、経営陣の一人である四谷 慧（よつや けい）だった。

しかし直輝にとって慧は、ただそれだけの関係ではない。

慧は直輝の大学の2年先輩であり、大学病院からこの病院へ引き抜いてくれた恩人でもある。

さらに、慧は唯の従兄でもあるため、直輝にとっての親戚でもあり、そして友人また理解者でもあった。

「死にそうな顔してるって聞いたけど」

途端に白井の顔が浮かび、余計なことを言ってくれた、と直輝は顔を顰めた。

きつとヨシさんの前での失態についてもしゃべってくれたに違いない。

「…ほんとにそんな顔してるな」

慧はほんの少しだけ楽しそうな顔で、珍しそうに直輝を見ている。

慧は機微に敏いところがある。

直輝は、慧に何もかも知られたような気がして、内心ぎくりとした。有衣のことは、慧には何も話していないし、話そうという気も起きなかった。

多分それは、唯のことにに関して、後ろめたさがあるからだ。

「唯が死んだときと、似てる」

その慧の言葉に、今度こそ直輝は動揺を抑えられずに、慧をまともに見ることになった。

心臓が、強く早く打つせいで、息苦しささえ感じる。

探るような慧の目に、恐ろしいほどの狼狽を覚えつつも、直輝からはその目を逸らせない。

少しの間を置いて、納得したような慧が、ひとりで頷きながら視線を他にやる。

「誰にも遠慮するな。俺にも、唯にもだ。唯は、もういないんだ。

それに、だいたいお前はまだひとりでいられるような年じゃないし、ハルだっているだろ」

歌うような、軽い口調だった。

実際、慧の発した音声も、軽く風に流されたように空へ消えた。

やはり慧は気づいた。

直輝が唯からほかへ心を移したことに、気づいている。

何も言えないでいた直輝に向かって、慧はもう一度念押しするように言う。

「変な遠慮とか迷いのせいで、せっかく見つけた大切だと思える人間をまた失うのは嫌だろ？」

有衣の来ない数日間は、気の遠くなるような日々になった。

有衣が来ても、温かい時間は今、手の届かないものになっている。

そのうち、永遠に失われる日が来るかもしれないとは、考えたくもない。

「…悪い」

「謝るなよ」

「正直…、俺もまだ混乱してるんだ」

「…そうだろうな」

短い返答に、様々な想いが感じられて、直輝は不覚にも泣きそうになり手で目を覆った。

慧とは、もともと唯に紹介されて出会ったのだ。

直輝の唯に関わることは、慧もほとんど全てを知っている。

恐らく、直輝と同じくらい、もしかするとそれ以上に、慧も心がざわついたに違いなかった。

「で？ そんな顔してる、ってことはうまくいってないんだな」

徐に聞く慧の質問に、直輝は当面の問題を思い出した。

とにかく、有衣に避けられている事態を何とかしなくてはいけないのだった。

結局慧にどんな状況なのかを直輝は吐かされ、聞いた慧は呆れたように直輝を見やった。

「その臆病さ加減、どうにかしろ。そんなの、さっさと謝って掴まえる、っつー話だよ」

それは、そうなのだが。

自分でもわかっただけはいることをさらりと指摘され、直輝は苦笑う。

「ハルをダシにするとか」

「は？」

「逃げられたのはハルがもう寝てた日だろ。仕事が終わったから、ここぞとばかりに帰ったんだろうよ。」

だからハルが寝てないうちに帰って捕まえれば、……早退しろ。

外来は代りに俺がやってやる」

「はあ？」

「どうせそのせいで仕事になってなかったんだろ。いいから、今日は帰れ。」

うまくいかせて、来週からきちんと仕事してくれればそれでいいし」

提案に目を丸くした直輝だが、言われたことは理にかなっているため、直輝は従うほかない。

直輝は慧に追い立てられるように、早退手続きを済ませると、実際に出口まで見送られてしまった。

「今度、紹介しろよ」

挨拶代わりのそんな言葉に、直輝は曖昧に頷いた。

紹介できるような間柄になれば、の話なのだと思いつつ、妙に気分は良かった。

10 (後書き)

やっと出てきました、直輝の味方キャラ。

うじうじくんな直輝に発破かけてくれるキャラは、唯の従兄の慧でした。

慧のおかげで直輝も元気が出てきたようですね。

次回、とうとう、ようやく、溝が少し修復できる…かも？^^；

玄関のドアを開けると、いつもは無いものが目に入って有衣は目を見開いた。

男物の靴だ。直輝の靴がある。

今日は土曜日で直輝の帰りは早いはずだが、こんなに早い日は無い。珍しくしまい忘れたのだろうか、そうであってほしい、という有衣の願いも空しく、廊下の奥で物音が聞こえる。

そして、ドアを閉める音と同時に、直輝の姿が見えた。

「おかえり」

「パーパー!!! ただいま! きょうは、はいね!」

いつになく早い直輝の帰宅に、晴基ははしゃいで直輝のもとへ駆け寄る。

その晴基を微笑ましいと思いつつながら、有衣の内部では驚きと狼狽と不安がいつぱいになっている。

このまま、帰ってしまいたい。

直輝がいるなら、自分の仕事はしなくてもいい。

けれど、今日は土曜日で、契約内容に含まれているため、そうもいかないことは十分わかっている。

どうしてよいかわからず、有衣は靴も脱げずに玄関で立ちつくした。直輝はそんな有衣に、少しだけ気まずそうな顔をしながらも、中へ入るよう促した。

「…入って」

「あ、はい…」

慌てて靴を脱ぎ、廊下へ足を踏み出したが、有衣はまだ今の状況を乗り切る方法を思いつかずにいる。

有衣が食事を作る間、直輝は晴基と入浴することにした。

怪獣のような晴基を風呂に入れるのは、直輝にとってもけっこうな

労働だ。

髪を洗っていると、わざと頭を振った晴基のせいで、シャンプーの泡が飛んできて直輝は反射的に目を瞑る。

「こらっ！ おとなしくしてなさい」

「えへへ」

晴基は、直輝の珍しく早い帰宅が嬉しくて仕方がないらしく、さきほどから全く落ち着かない。

目に沁みる痛みに顔を顰めながらも、直輝は晴基のことが愛しくてたまらない。

それに比べ、と直輝は思う。

有衣はかなりの戸惑いと狼狽を表情に表していた。

直輝は、有衣が直輝を避けようとする理由を、正しくは知らない。不安を感じつつも、せつかく慧が作ってくれた今日という機会を、どうにか生かしたいと直輝は決意していた。

料理をしている間に、有衣はどうか落ち着きを取り戻していた。

晴基が起きているときに、直輝とここで過ごす時間のことは、今まですっかり失念していたのは浅はかだった。

そう気づいたが、どうせもう後の祭りなのである。

今日はもう諦めるしかない、と有衣は早々に自分を抑え込むための闘いを放棄することにした。

そうすると不思議なことに、このところ感じていた重苦しさも、消えたような気がした。

晴基用の盛り付けをしていた時、晴基がリビングに走り込むのが見えた。

いつもの追いかけてこを、今日は直輝とするつもりらしい。

ててて、という小さな足音と一緒に、ぼたぼたぼた、と水が落ちる音が聞こえる。

直輝はまだ追いかけてこない。

このままでは床がかなり濡れてしまつ、と有衣がキッチンから出かけた時、ようやく直輝が走ってきた。

晴基はきゃーきゃーと甲高い声で逃げようとしたが、直輝の歩幅では敵わない。

有衣と違い、直輝はすぐに晴基を捕まえ、タオルでわしゃわしゃと拭き、手早く晴基を拭く。

しかしよくよく見れば、直輝の頭もまだ濡れていたせいで、床はさらに濡れていた。

「ハルく、濡れたまま行くなよお」

「パパきょうは、ふくきたの」

「…あのなあ」

しかもそんな会話が聞こえてきて、有衣は思わず笑いをかみ殺した。直輝は慌てて服を着たらしく、ジッパが途中で服の生地を噛んで上がらないままになっている。

そこから見える素肌の色に、有衣はどきりとして慌てて目を逸らす。落ち着きを取り戻そうと懸命に努力した後、有衣はようやく気を取り直してふたりに声をかけた。

「ハルくん、床拭いてね。…直輝さんも、髪拭いてくださいね」

「はい」

「あ、…ごめんね」

直輝は、今気づいた、というような顔で情けなさそうに、持っていたタオルを今度は自分の頭にやる。

前にもこんなことあったな、と有衣は懐かしく思い、柔らかな顔で笑った。

その笑顔に直輝は一瞬虚を突かれたような表情を浮かべたが、それはすぐに消えたため有衣は気づかない。

しかしそのとき、直輝の中には、言いようのない温かさ喜びがじわじわと広がっていた。

夕食と後片付けの時間は、思いの外和やかだった。

有衣が晴基に辛抱強く非効率的な後片付けの手伝いをさせている姿は、初めて見た直輝には驚きでもあった。

晴基が喜んで皿やグラスを一つずつ運ぶ姿も、直輝の知らないものだった。

そういえば、自分が片づけているときに、晴基は何か言いたそうな顔をしていた、と思います。

自分でも運べるのだ、と言いたかったのだらうと気づかされた。

恐らく、有衣がそのように助けてくれたのだとわかり、直輝は有衣に対する気持ちがさらに深まるのを感じた。

しかし、晴基を寝かせる時間が近づくとつれ、有衣は緊張の高まりを隠せなくなっていく。

落ち着きなく時計と晴基、そして鞆の間をさまよう有衣の視線に、直輝は気づいていた。

帰ろうとするタイミングを計っているようだが、直輝にまだそのつもりはない。

晴基がうつらうつらしだすと、有衣は直輝の視線を逃れるように、さっと晴基を抱き上げベッドルームへ消えた。

直輝は咄嗟に、意味もなく追いかけたくなったが、まだその時ではない、と体をソファに縫い付けた。

どれくらいの時間が経ったのか。

晴基はもうとうに眠りに入っているが、有衣はまだその場から動けずにいた。

リビングには、直輝がいる。

自分はもう家に帰らねばならないが、その前に、直輝がひとりである部屋へ行かなければならない。

その事実が、有衣を動けなくさせていた。

晴基が起きているときはよかったのだが、もう眠ってしまった。今度は、有衣が一人で直輝に対峙しなくてはならない。

それが、とてつもなく大きな壁に思えて、有衣の鼓動は速まった。

有衣が部屋に入って30分は経過した。晴基の様子からして、多分とうに眠っているだろう、ということは一簡単に予想できる。

有衣が部屋から出てくるのを、直輝は忍耐して待っていた。やがて、恐る恐るといった風に部屋から出てきた有衣の顔は、傍から見ても強張っていた。

直輝の顔をちらりと見てから、一目散に鞆のもとへ歩こうとするのを、直輝は内心苦笑して待ったをかける。

「有衣ちゃん、ちょっと…話があるんだ」

「え…」

はつきりと、困惑の表情を浮かべて固まる有衣に、直輝は少しだけ勇気が萎えそうになる。

だが、今日はもう決意を変えるつもりは無い。

立ちあがって、固まったままの有衣をソファに促すと、それでも有衣は素直にソファに座る。

今まで直輝がいたのとは反対側だったが、今度は直輝がそちらに移り、有衣は驚いて横の直輝を見上げた。

直輝がその視線をまともに受けて逸らさずにいると、有衣は少しだけ頬を染めて気まずそうに俯いた。

その、頬を染めるといふ反応が、直輝の想定を超えたものだったので、緊張を別にしても直輝の鼓動が速まる。

「…まずは、あの夜言ったことについて、謝らせてほしい。俺が、悪かった。」

あんな風に、言うべきじゃなかったし。有衣ちゃんを傷つけてしまったって、本当に、後悔してる」

有衣はもう一度、視線を上げたが、その顔は驚きに満ちていた。

有衣の唇が物言いたげに震えたのを見て、直輝は促して話させる。

「でも、あれは…私が、悪かったんです。私が勝手にハルくん」

「ハルがお願いした、って聞いたよ」

「あ、でも、それでも…。直輝さんの言葉は、間違っっては…」  
言いかけてはつとしたように言い淀んだ有衣を見て、突然思いついたことが直輝の脳内を駆け巡った。

まさか、有衣にも自分と同じ想いがあるのではないか。

だがそれは、あまりにも自分に都合のいい考えだ、と自重しつつも、期待が芽生えるのは止められない。

「うまく言えないけど、…あれは、俺の願望に近い」

「…え？」

「あの時は自分でも気づいてなくて、咄嗟に怒ってしまったんだ。ごめん…。」

本当は、今有衣ちゃんが、こうやってまた来てくれることだけでも感謝だけ。

それでも俺としては、ハルのためにも、…俺のためにも、前みたいに笑ってほしいと思うんだけど、どうかな」

直輝は、“俺のために”、というところに重きを置いたつもりで話し、有衣の反応を窺った。

有衣は話の全容を掴もうと努めつつも、直輝の言葉の意味を図りかねていた。

直輝の願望、とはどういう意味だろう。

晴基の本当の母親の代りをする事？ それとも単に母親の役目を果たす事？

それは同じようできて、全く違う事柄だ。そう思った瞬間、有衣には自衛作用が働いた。

直輝は、晴基のために、とまず言った。変に期待するのは命取りだ。ただ直輝が、自分が以前と同じように接することを望んでいるという事は理解できた。

有衣としては、自分が辛くなるだけだとしても、それでも直輝と過ごす時間は魅力的に思える。

晴基を口実にするのは忍びないが、自分を抑えるのにはほとほと疲

れている。

それならば、いつそのこと、以前と同じように温かな時間を過ごせるほうが、良さそうに思えた。

「わかりました。直輝さんが、そう思ってくれるなら……」

「よかった……」

心底ほっとしたような顔と口調で直輝がそう言うのを、有衣は複雑な気持ちで見つめた。

## 11 (後書き)

直輝さん、伝わってませんけど!!!

…な、感じて終わり、次回へ^^^;

表面的には元通りになりますが、内面ではまだ隔たりが生じたままです。

直輝は基本、鈍感ですからね…。

有衣も有衣で考えすぎというか…。

まあ、人を好きになると、普段できることもできなくなったりしますもんね。

そんな感じで、日常は続き、次回はハルの運動会です。

いつもは無い小さな旗の飾り付けが、色とりどりで眩しい。今日はかねてから案内されていた、晴基の保育園の運動会だ。

お弁当の入った大きな紙袋を片手に門をくぐり、有衣は場所取りをしているはずの直輝の姿を探した。

普段部屋の中でしか会っていないため、外で会うことに若干緊張している。

しかも頼まれたお弁当は、晴基用とあと有衣を含めて大人4人分ということだった。

直前に人数が増やされ、直輝のほかに誰が来るのかを有衣は聞いておらず、ますます緊張が増した。

「有衣ちゃん」

声をかけられ視線を向けると、直輝が手招きしてくれているのが見え、有衣は笑顔と会釈を返して足を向けた。

以前と同じように、という直輝の希望通り、有衣は前と同じ生活を送っている。

学校の後に晴基の世話をし、晴基が眠り直輝が帰った後は直輝と時間を過ごす。

それは温かく楽しい時間ではあるが、有衣の心の中に少しずつ重しを積み重ねてもいる。

だがそれも自分で選んだことだ、と有衣は思っている。

それに、晴基と直輝と全く会わずにいたあの数日間と比べれば、どんなことも辛くはない、と思えるのだ。

有衣が直輝のもとまで行くと、直輝はさりげなく荷物を有衣の手から引き受ける。

その行動に、有衣はいつもながら少しの戸惑いを覚える。

単なるあたたかさではなく、何か別のものが存在しているかのよう  
に錯覚してしまうからだ。

「ありがとう。急に人数増やしちゃったから、大変だったでしょう」  
「いえ、大丈夫です。簡単なものばかりだから、2人くらい増えて  
も変わらなかつたですよ」

「そう？　ならよかつたよ。せつかくだから、有衣ちゃんのお弁当  
食べさせたくてね」

「…あの、どなたが来られるんですか？」  
ずっと気になっていたことを、有衣は恐る恐る尋ねる。

晴基の祖父母、それも母方の祖父母が来るのではないか、と有衣は  
密かに恐れていた。

そんな人が来るのだとしたら、自分がいることで相手を不快にさせ  
てしまう恐れがある。

そして何より、自分が居る意味や気持ちの置きどころが無くなって  
しまう、ということが怖かつた。

「慧、あ…えーと。…ハルの母親の従兄で、慧というのと、その母  
親で妙（たえ）さん。」

俺たちから見るとおばさんなんだけど、“おばさん”って言われ  
るの嫌みたいで、名前で呼んでるんだけど。

ふたりとも、普段から俺がお世話になつてる人たちなんだよ」  
「そうなんですか」

有衣は咄嗟に、清香さんと似ている、と母親の顔を思い浮かべて笑  
つた。

そして、どうやら恐れていた祖父母は来ないらしい、と知り不謹慎  
だと思いつつも、ほっとした。

「あの、おじいさまとかおばあさまとかは来られないんですか…？」  
「俺のほうは、今親父がちょっと病氣してて、お袋も今年はやめて  
おくつて。」

ハルの母親のほうは、どちらももう亡くなつててね。だから、今  
年は誰も来ないんだ」

「そう、ですか…」

有衣は、直輝がずっと“晴基の母親”という表現を使うのに気づいていた。

直輝としては、何と云えばよいか迷ったの末の言葉の選択だったのだが、有衣がそれを知るはずもない。

有衣には、その表現がどうしてか牽制に聞こえ、有衣は感情を押し殺すことを、更に課す必要性を感じた。

それでも、“妻”という表現を使われてしまっていたら、きっともっと切なかつただろう。

そう思うと、自分自身にすらコントロールできない気持ちだが、疎ましくもあつた。

あともう少しで園児の入場、という時に妙が到着し、数分遅れて慧が到着した。

妙は少しだけ驚いたように有衣を見つめ、それから笑顔で挨拶をした。

慧はというと、何やら訳知り顔で有衣を見つめ、そしてこちらも笑顔で挨拶をした。

有衣はその視線にかなりの緊張と居心地の悪さを感じつつ、やはり笑顔で挨拶を返す。

なぜこんな風に、観察されるような視線が向けられたのか、その視線の意味を、有衣は知らない。

直輝は、唯が亡くなった後、基本的に女性そのものを遠ざけてきた節がある。

整った容姿、柔らかな性格、職業故の社会的地位だけを考えても、寄ってくる者が多いが、受け入れなかつた。

またハウスキーパを雇ってはいたものの、決してビジネスのラインを越えて接したことはない。

マンションの外で会おうとしたことなど、これまでに一度もなかつた。

その直輝が、晴基の運動会に連れてきた女性、それも義理とはいえ親類に紹介した女性。

このことがどういう意味を持つのか、妙も慧もわかっている。わかっているのは当事者の有衣だけ、という奇妙な事態になっていることに、直輝はまだ気づいていない。

4人はそれぞれの思いを抱いたが、園児の入場が始まると、晴基を見ようとすぐに気持ちを切り替えた。

30人ほどの小さな子どもたちが、小さな運動場の真ん中に立ち、保護者たちにお辞儀をすると拍手が沸く。

「あ、ハルくん」

一番最初に晴基を見つけたのは、有衣だった。

こっそり手を振ると、晴基も有衣に気づいて満面の笑顔で手を振り返す。

晴基はこっそりのつもりだったようだが、かなりの大きな振りに、周囲の保護者からも笑いが起こった。

一緒に注目を浴びて気まずく笑う有衣を、直輝、慧と妙も微笑ましく思う。

その後の競技は、まず1歳児のはいはい競争から始まり、2歳児のかけっこ、3歳児の障害物競争と進んだ。

晴基はゴール目前にある跳び箱で躓いたが、しかし諦めたり泣いたりせずにきちんとゴールした。

そんな姿に、大人4人は感心し、そしてどこか励まされたような気持ちになる。

それから、小さなポンポンを持つてのお遊戯の部に移り、直輝は撮影に忙しかった。

そうしてあつという間に時間は過ぎ、お昼の休憩になる。

有衣は、なんとなく4人であることに気づきまりを感じ、晴基を迎えに行く役を買って出て歩き出してしまふ。

そんな有衣の後ろ姿を眺め、慧は怪訝そうに直輝に視線をやった。

「なあ、もしかして、まだちゃんと付き合っていない…？」

「え？ ちゃんと…」

直輝は、そこではたと気づいた。

以前のように一緒に過ごしたい、と言って、有衣はそれを了承した。しかし、ふたりに何か特別な進展があったわけではなく、むしろ感情的な繋がりは無いに等しい。

有衣との繋がりは、結局のところ晴基が間に入ることでしか保てていなかった。

言葉を切ったまま黙り込んでしまった直輝に、慧は脱力感を感じる。せつかく代りまでして早退させたのに、あのときの半日が全く生かされなかったということである。

一瞬、慧はあの日の出来事を思い出しそうになり、顰め面で頭を振った。

今は自分のことを考えている場合ではない。

慧は、直輝の臆病な面や鈍感な面を知っているつもりでいたが、まさかここまでとは思っていなかった。

「おい、自分の気持ちも言っていないとかじゃないだろうな？」

「え？」

「だから、好きだとか、大切だとか、……言っていないんだな」

こんな基本的なことを、今の今まで気づかずになっていたことに、直輝は大きな衝撃を受けた。

固まったまま反応を返さない直輝に、慧は大きな溜息をついて妙を見やった。

ふたりのやり取りを聞いていた妙も、慧と目を合わせ、呆れたように直輝を見る。

「直輝くん。私たちに紹介するよりも、先にすることがあるでしょう…。」

「どうりで、あの子ずっと気まずそうにしてたわけね。あーあ、かわいそう…居心地悪いでしょうに」

「だいたい、あんまりもたついていると他に取られるぞ。あの子若いんだし、普通にかわいいし。」

あ、あーあ、ほら…あそこ見てみる。さっそく若い男に声かけられちゃってるし」

妙の尤もな忠告と、慧の嬉しくない忠告に、直輝は自分の馬鹿さ加減が厭になる。

そして慧の指差す方向を見ると、晴基を迎えに行ったはずの有衣が、武先生と笑って話しているのが見える。

その瞬間直輝は、腹の底のほうから、沸騰したような熱の塊が沸くのを感じた。

それは紛れもなく、嫉妬だった。

けれど、今の有衣とのあやふやな関係では、表現しようのない感情だとわかっている。

そんな事態を招いてしまった自分自身に、直輝は言いようのない怒りを感じた。

「…迎えに、行ってくる」

押し殺した声で呟き、大股で歩き出した直輝に、慧と妙は顔を見合わせて苦笑を洩らした。

歩いていく直輝の背中に視線を戻し、妙はぼつりと聞く。

「慧、あんた知ってたの？」

「まあ、比較的最近に」

「そう…」

唯を自分の子供のようには思っていた妙には、今日の対面は少々衝撃的でもあった。

直輝の前でそれを出さなかったのは、直輝のことも唯と同様に大切な存在だからだ。

それに実際、このまま直輝が独りであるのも心苦しい。

直輝が唯をどれだけ大事にしてくれたかを、直接知っているだけに尚更そうだった。

そんな妙の複雑な胸の内を思いやる慧は、少しだけ苦く笑う。

「焚きつけたのは俺なんだよ。…悪いけど」

「…誰も、悪く思う必要なんて無いのよ。でもまあ、あの子があんまりにも若く見えて驚きはしたけど」

「ああ、若いね。…確かに、若い」

含み笑いをしながら言った慧を、妙は訝しげに見た。

「幾つか知ってる?」

「…さあね」

これは多分知っている、と妙は思ったが、口を割りそうにない息子に溜息をついて諦めた。

対面後の動揺は、まだ妙の中で小さく続いていた。

## 12 (後書き)

運動会です。

小さな子たちが動き回るのを想像しただけでかわいいです。

種目があやしいですが、運動会メインではないので許してくださいね^^;

直輝先走っちゃいました。

紹介する前にまず有衣に告れよ！状態ですが。

慧と妙に突っ込まれましたので、次回かその次あたりでがんばるのではないかと思われます。

さて。

慧が直輝に代って外来をしたあの日何があったのか。

慧が有衣の年齢を知っているのはどうしてなのか。

気づかれた方、多いでしょうね^^;

こっちの話はいずれまた…。

晴基が園長先生と話しているのを見つけ有衣が声をかけようとしたところ、背中から声がかかる。

振り向くと、運動会仕様でジャージ姿の譲があり、有衣は思わずほっと息をつく。

譲とはあれ以来、ときどき学校の屋上で会って話したり相談したりする仲になっていた。

友情というよりは、晴基を軸にして、保護者と相談役のような関係で落ち着いている。

「来れてよかったな」

「うん。みんなすごくかわいいし、見てて楽しい」

「そうだろ？」

子どもたちがかわいくて仕方がない、そんな顔で譲は笑い、つられて有衣も笑った。

「そういえば譲くん、午前中見なかったね」

「ああ、俺は午前中は中で0歳児のお守。午後からは俺も出るよ」

「そっか。午後は大人の参加率高いもんね」

そんな会話を交わした後、譲は別のスタッフに呼ばれたため、手を振って去っていく。

有衣は譲と顔を合わせて、少し落ち着いた気持ちになり、自然と顔の強張りも解けていた。

午前中は、園児たちの姿を見て勿論楽しんだが、直輝に近い人と一緒にいるのは居心地が悪かったのだ。

良い人だというのは伝わってきたが、直輝の亡くなった妻の親戚だと思うと、やはり気が重かった。

何でもない会話を交わすことで、有衣の気分は晴れ、譲に心の中で感謝する。

有衣のすぐ後ろに近づいてきていた直輝は、軽い、いやかなりの衝撃を受けていた。

武先生と話す有衣の表情は多分今日見た中で最も明るく、声も弾んでいた。

自分の前ではいつも敬語の有衣が、“先生”にもかかわらず武先生を相手に、敬語を使わないと知った。

その態度には、自分の知らない有衣の“素”が表れていたような気がする。

そして、“譲くん”と呼ぶ声に親しみを感じて、直輝は目の奥が真っ赤に染まった気がした。

この感情は、現状では理不尽なものだ。

そうわかっているからこそ、直輝は余計に複雑な感情が渦巻くのを感じた。

その時だった。

「ゆいちゃん！」

大きな声で呼ばれ、小さな衝突の衝撃が有衣の足に走る。

驚いて足元を見ると、晴基が有衣の足に抱きついていて。

「ハルくん…？」

「ゆいちゃんが、ママだもん。おべんとも、あるもん…」

つつかえつつかえの言葉に晴基の顔を覗きこむと、晴基は涙目になっている。

晴基が人前で有衣のことを実際に口に出して“ママ”だと主張したのは、初めてのことだった。

人が勝手に誤解するか、あるいは有衣が単に“ママ”のように行動するだけで、今までは済んでいたからだ。

有衣が、晴基が話していた園長先生のほうに目を向けると、園長先生も有衣を困惑気に見ていた。

園長先生は、有衣が西岡家のハウスキーパであることを知っているのだ。

「あの…」

「いえ、あの…そうじゃ、ないんですけど」

有衣が慌てて、しどろもどろになりながら返事をしたとき、靴底が砂を踏む、じやり、という音が間近で聞こえた。

はつと後ろを振り返ると、直輝が立っているのが見え、有衣は顔色を失くす。

晴基の声は大きかったし、この距離では、今の会話は聞かれてしまっただろう。

またこの間の晩の繰返しになると、と有衣は怯えた。

直輝も、晴基の声は聞こえていた。

以前に感じた恐れや怒りのような感情は無く、ただ有衣の反応が気になる。

しかし振り返った有衣が、直輝を認めた瞬間怯えの混じった表情を浮かべたのを見て、直輝は息が詰まった。

あの晩のできごとが、自分の言葉が、今でも有衣に押し掛かったままなのだ、気づかされる。

咄嗟に声を出せないでいると、園長先生が先に直輝に気づき、声をかける。

「ハルくんのお父さん、今日はお弁当はどうなさいます？」

聞かれて、初めて思いだした。

去年は、園が厚意で晴基のお弁当を用意してくれていたのだった。

今年是有衣がいることもあり、すっかりそんなことも忘れてしまっていた。

それで、晴基の言葉の意味もわかる。

園長先生が晴基にお弁当の話をしたのだろう。

有衣に“ママ”としてお弁当を作ってもらったと思っっている晴基は、必死に反論した、ということだ。

内心苦笑しながら、有衣に抱きついたままの晴基の頭を撫でてやる。

「すみません。今日は用意してもらったのがあるんです」

「そうですか。それは、よかったです」

優しげにそう言うと、園長先生は中に入って行く。

心なしか体を縮めて立っている有衣に、直輝は努めて柔らかい視線を向けた。

その穏やかさに有衣はいったんほっとしたように見えたが、まだ完全に怯えと不安を拭い去れてはいない。

そんな顔をしないで、いいのに。

直輝は、今すぐ有衣の不安や誤解を解きたくて、きちんと話したいと思っただが、この状況では無理だ。

お昼の休憩時間もそれほど長いわけではないし、晴基にも食事をさせなくてはいけない。

直輝は、席に戻るために、有衣と晴基をそっと促した。

直輝の反応が予想に反していたため、有衣は安堵したが、やはり気分は優れなかった。

けれど、晴基のために、そして何も知らない慧や妙のために、有衣はどうにか笑顔を作る。

席に戻ると、晴基はわくわくとした気持ちを隠せずにいた。

「おべんとー!!」

期待いっぱい顔の有衣を見上げるそんな姿に、有衣の気持ちはほぐれ、ようやく作り笑顔を脱する。

晴基用に1人分の小さなお弁当と、大人用の大きなお弁当を作った。

晴基はそれを大事そうに抱えて受け取り、お弁当のふたを開けると目をキラキラさせて喜ぶ。

「すごいね！ アンパンマン！ チーズもいるね！」

「うわ、初めて見た。キャラ弁」

はしゃぐ晴基のお弁当を覗きこんだ慧は、感心したように呟く。

晴基用は、アンパンマンのおにぎりとめいけんチーズの顔を描いたコロッケがメインなのだ。

大人用も、キャラクタ物ではないが、それなりに工夫はしてあった。直輝も慧も、そして妙も、有衣の仕事に感心し、口々にお礼を言う。有衣と妙はやがて、料理談義で盛り上がり、お互いが内心で感じていた気まずさもそのうち消えた。その様子を、直輝と慧は意味ありげな視線を交わしつつも、ほっとしたように見守っていた。

午後の競技は、まず親子競争から始まる。三輪車に乗った園児と、その三輪車を後ろから押して走る親の競争だ。

日頃の運動不足がたたり、足を攣らせる親も少なくないが、実は大いに盛り上がる。

子どもの前で恰好つきたい気持ちや、親同士の密かな対抗心が大きくなるせいかもしれない。

直輝も例外ではなく、そんな姿を、有衣はいとしそうに見つめた。直輝の前では必死に覆い隠そうとしている気持ちは、直輝が遠くにいる今、菴が外れている。

そんな有衣の様子に、慧と妙が気づかないわけはなく、ふたりは余計に直輝の鈍さを感じて苦笑を漏らした。

その後、園児たちだけの玉入れを挟み、親だけの風船割り、親子参加の綱引きで競技が終わる。

最後にまた園児たちが中央に集まって、保護者に向けてお辞儀して運動会は締めくくられた。

やがて皆が帰り始め、運動会を終えた充実感と、イベントが終わった侘しさが漂う。

門のところには、お見送りで譲を含め先生たちが列になって立っていた。

直輝の後ろを歩いていた有衣は、譲の顔を見た途端、昼のできことを相談したくなってしまった。

有衣の表情で、何か言いたいことがあるらしいと察知した譲は、そつと列から外れて有衣の近くに寄る。

先に門を出て外からそんなふたりを見た直輝は、咄嗟に慙然とした表情になり、慧に見咎められ笑われた。

有衣は直輝のそんな様子に気づいていなかったが、譲は直輝の視線に気づいていた。

常々有衣がここまで悩む必要は無いと思っていたが、それを確かめようと、必要以上に有衣に近づいてみる。

譲の思った通り、先ほどよりもさらに強くなった視線が痛い。

やっぱり両思いなんじゃないか、と内心苦笑しつつ、かわいそうなふたりのために協力してやる。

「大丈夫。絶対怒ってないと思う。つか、素直に気持ち伝えたら、案外うまくいくかもよ」

「え？ でも」

「ほら、待つてるし、早く行ったほうがよくね？ じゃ、今日はお疲れさん」

追い立てるように有衣を外に出し、譲は元の列に戻る。

これで多分今日の夜辺りにはうまくいくだろう、と思うと譲は、ひな鳥を巢立たせたような妙な気分浸った。

晴基は運動会で疲れたのか夕食前から既に眠そうで、食べ終わるとすぐに眠り始めてしまった。

有衣はまだ直輝とふたりで話す勇気が起こらず、晴基を抱いてベツドルームへ逃げた。

晴基を寝かせてあげ、しばらくそこで晴基を見つめながら、有衣は直輝のことを想う。

帰り道、そして家に帰ってからも、ずっと喋っていたのは晴基で、直輝はほとんど一言も喋らずにいた。

表情は普通で、あからさまに不機嫌そうではなかったのだが、何を思っているのかわからない。

有衣としては、昼間のできごとのことが気がかりだった。

直輝は以前のようにには反応しなかったが、本当はどう思っているのだろうか。

譲の言葉を思い出し、素直に気持ちを伝えるなんて自殺行為だ、やっぱり無理だと頭を振る。

一方で、譲は根拠もなくそんな言葉を言わないのではないかと、少しだけ期待もしていた。

いずれにしろ、昼間のことについては多分直輝も話し合いが必要だと思っっているはずだ。

有衣は覚悟を決めて立ち上がると、リビングへ通ずるドアノブを握った。

### 13 (後書き)

なんか、無事に運動会終了…。

キャラ弁なんて、作ったこと無いんですけど、書きたくて書いちゃいました。

キャラクタ名をみなまで出しちゃいましたが、大丈夫でしょうか…。  
ちなみに、ほっぺたはにんじんです。

目はのりとチーズを使って、チーズの耳はウィンナで。(チーズが  
ややこしいな…)

さて、イベントでドキドキなことが起こる予定でしたが、  
成り行き上、ハラハラなことが起きてしまいました。予定外…^^;

直輝と有衣、双方覚悟が決まったところで。

じれったかったふたりも次回、ついに告白します！

直輝はキッチンにいた。

土曜日のいつもの習慣で、ビールを飲んでいたのだが、緊張のせいか酔えなかった。

後から一気に酔いが回る可能性を考えると、それ以上飲むのも気が引け、コーヒーを入れることにした。

有衣も、緊張しているようだった。

多分、昼間のできごとについて気にしているのだろう。

眠った晴基を抱えて、逃げるようにベッドルームへ行ってしまった。有衣は、怖がっているようにも見えた。

しかし、何を？

「俺を、か」

昼間の直輝を見たときの表情が、直輝の目に焼き付いている。

あの晩、泣くのを我慢していた有衣の表情と、交互に直輝の脳裏に浮かんで消える。

豆を挽きながらそんなことを考えていると、途中で刃に大きな豆が引っかかり、手に衝撃が走った。

「痛え……」

手の痛みは、然程なかった。

本当に痛みを訴えているのは、心だ。

慧や妙の言つとおり、まず自分の気持ちだけでも伝えなければならぬ。

受け入れられるかは別としても、今日こそ、現状を打破したい。

けれど、目を合わせたときに頬を染めて俯いた有衣に、少しだけ期待と樂觀することは忘れなかった。

有衣がドアを開けた瞬間、ガリガリという音とが聞こえ、馴染みのある香りがした。

直輝はリビングにはおらず、キッチンで作業しているのが見えた。有衣は慌ててキッチンに入り、直輝から作業を引き継ごうとする。

「あの、座っててください。私、やりますから」

「いいよいいよ。俺やるし」

直輝の返答を待たずに有衣が手を伸ばしたため、直輝のそれと触れ合ってしまった。

「…っ」

お互いが息を詰め、体を強張らせ、手を引こうとしたため、コーヒーミルがぐらつく。

直輝がそれに気づいて手を伸ばしたが、間に合わなかった。

「あ」

意味のない音が口から出たが、どうしようもない。

台から落ちたミルは傾いて有衣の体にぶつかり、ほぼ挽き終わっていた豆の粉も宙を舞った。

有衣はミルや豆の粉を床に落とさないように、慌ててしゃがみ込んでエプロンの裾を広げた。

「…大丈夫？」

「だ、大丈夫、です。すみません…私が、無理に代わろうとしたから」

「いや、俺も、ごめんね」

直輝は謝りながら、有衣の膝の上からミルを取り上げ、台の上に置き直す。

そして、少し躊躇した後、有衣に手を伸ばした。

「粉、かかっちゃったね」

「え？」

自分に伸びてくる直輝の手に、直輝の意図を理解した有衣は焦った。だが今エプロンから手を放してしまえば、せつかく落とさずにいた粉を、床にぶちまけてしまう。

どうしよう、どうしよう。

そもそもこんな事態になったのだから、直輝の手と触れてしまった

からではなかったか。

こんな、この上直輝に触れられてしまったら、どうにかなってしまいそうで、怖い。

直輝の手が触れる直前、有衣は思わず目を瞑ってしまった。

だがそんな甘い恐怖は、すぐに熱に取って代わる。

直輝の手が、そっと有衣の髪や頬に触れて、付着した粉を少しずつ払っていく。

その触れ方は、優しく、まるで愛されているかのように、錯覚してしまうほどだった。

有衣の心臓は、音が聞こえてしまうのではないか、と思うほど脈打っている。

それに気を取られていたせいで、有衣は直輝の言葉をほとんど聞いていなかった。

「エプロン、外すよ」

直輝は、有衣の髪を少し上げ、うなじで結んであるエプロンのひもを外そうとした。

ひもに触れた時、必然的に有衣の首筋にも触れることになり、直輝はぎくりとする。

何も考えていなかったが、実際今の体勢はといえば、まるで直輝が有衣を抱き込んでいるようだった。

有衣はおとなしくしているが、息を詰めているようだし、肩も強張って見える。

直輝は、できるだけ自然に、と頭の中で念じながら素早くひもを外す。

しかし、結んであるのは一か所だけではなく、腰にもあると気づいて、直輝は迷った。

この体勢のまま腰に手を伸ばせば、本当に抱きしめるような格好になる。

しかしわざわざ体勢を変えると、かなりわざとらしくなるような気

がする。

有衣が押さえている場所を直輝が代りに押さえれば済む話なのだが、直輝は頭が回っていないかった。

結局同じ体勢のまま、密着を避けるように右手を有衣の肩に置き、左手を伸ばして腰のひもを解く。

エプロンがするりと下に落ちると、有衣の手をエプロンから外して、シンクの上でエプロンをはたいた。

そして、床に散ったわずかな粉は、ふきんで拭いてきれいにする。

直輝は冷静になるために有衣を見ないようにしていたのだが、有衣がずっと身動きしないので、心配になる。

「…有衣ちゃん？」

呼びかけにも、応答がない。

いよいよ心配になり、直輝はしゃがみ込んで有衣の顔を覗きこんだ。

有衣の頭の中は混乱していた。

エプロンを外す、と言われたような気はしたが、まさかあんな体勢になると思わなかった。

指先だけでなく、体温まで感じてしまう距離が、有衣の閾値を超えていた。

けれど、緊張していたのは自分だけだ、と思う。

直輝は何も感じなかったからこそ、普通に後片付けをしていたに違いない。

直輝に名前を呼ばれても、有衣は咄嗟に反応を返せなかった。

覗きこまれる気配に、有衣はぱつと片手を直輝のほうへ突き出し、もう一方の手で自分の顔を覆う。

「何でも、ないです。ごめんなさい」

恥ずかしい。

多分、今顔は真っ赤になっている。

心なしか、目も潤んでいる気がする。

今、見られてしまったら、自分の気持ちは直輝に筒抜けになる。

だから、見られなくなかった。

有衣の、拒絶と思えるその反応に、直輝は傷ついた。自分が悪いのは、わかっている。手ひどく傷つけられた男相手に、あんな風に近づかれたくないだろう。

豆を挽きながら考えていたことを、今度は口に出してみる。

「俺が、…怖い？」

その問いかけを実際に言葉にしてしまうと、その意味は直輝の心に直接重く響いた。

それはそうだろうな。

またいつ怒られるか、またいつ傷つけられるか、わかったもんじやないし。

昼間もあんな顔してたしな。

直輝は、心の中で思っていたその自答を、無意識に口に出していたことに気づいていなかった。

俯いていた有衣は、聞こえてきた直輝の小さな呟きに啞然とした。

直輝は、有衣が直輝自身を怖がっていると誤解している。

しかも、その口調は、どこか傷ついているように聞こえた。

自分が今どんな顔をしているのかも忘れ、有衣は顔を上げてきつぱりと言う。

「それは、違います」

「え？」

驚いた直輝がこちらを向き、有衣はようやく自分の顔を思い出して、また俯いた。

直輝には、顔を見られてしまった。

きつと、自分の気持ちも伝わってしまっただろう。

それならもう、隠す意味もない。

顔を俯けたまま、それでもはつきりと口に出す。

「直輝さんが、怖いんじゃないです。怒られたり、傷つけられたり、そういうことじゃなくて。」

私が怖いのは…直輝さんに、嫌われること、です。怒らせるようなことを、してしまうこと、です」

いったん口を開くと、あとは止まらなかった。

「私は、直輝さんのことが」

「ストップ！」

「え…？」

好き、と言いたかった。

結果フラれるとしても、この気持ちは伝えてしまいたかった。

やはり、それは許されないことなのか、と有衣は落ち込みかけた。

有衣が何を言いだそうとしているのか、いかに鈍い直輝でもわかってしまった。

いやその前に、必死に覆っていた顔を上げてくれたときに、その表情から伝わってきた。

必死に隠していたのは、自分の気持ちを隠しておきたかった、ということの表れだ。

だから、それだけは有衣に最初に言わせてはいけない気がした。そうなってしまうえば、有衣はずっと負い目を感じてしまうような気がしたのだ。

思わず制止をかけた瞬間の有衣の表情が、かわいそうに思えたが、仕方ない。

「ごめん。俺に、先に言わせてほしいんだけど…」

「え？」

「…君が、今言おうとしたこと」

「…え!？」

何を言われているかわからない、という怪訝そうな表情から一変、有衣は驚きに目を見開いて直輝を見つめる。

信用無いな、と直輝は苦笑しながら、ようやく自分の気持ちを言葉

にした。

「俺は、君のことが、好きだよ」

口にしてみて、本当に好きだ、という気持ちがいじわりと全身に広がる。

どうして今までこんな大事なことを言えずにいたのか、直輝は自身のことからわからなくなりかけた。

「あの晩のこと、俺は自分の願望だった、って説明したでしょう。」

君がハルの母親に代ること、つまり、…俺のものになってほしい、って本当はずっと思ってたんだと思う。

最初から、俺は君のことが気にかかっていたし、君と居るのが心地良かった。

それなのに自分で認めるのが怖かったんだ。そのせいで、傷ついたり、怖がらせたりして、悪かった。

今日の昼、俺を見て怯えた顔したのがわかって、本当に反省したよ。…許して、くれるかな？」

有衣の目に、涙が盛り上がるのが見えた。

許しの言葉はまだ得られていないが、有衣は拒否しないだろう。

直輝は有衣の頬を手で包み、目に親指を滑らせて涙を掬った。

あの晩、直輝が“君”と言った時、有衣の心は凍った。

でも今、直輝が“君”と言った時、有衣の心は温かくなった。

触れられている手から、直輝の温度が伝わってきて、有衣は心地好さに目を閉じる。

「直輝さんを許すとか、そういうことよりも…私も、謝りたいです。」

ハルくんのママになってあげる、なんて直輝さんの知らないところで勝手に言ったこと、後悔してました。

…それから、私も、直輝さんのことが、好きです」

「うん。ありがとう…」

有衣の頬にあった直輝の手が、肩へ背中へ下がり、有衣はそのまま直輝に抱き寄せられた。

温かい腕の中で、お互いの心音が溶け出して重なるのがわかり、直輝も有衣も幸せそうにほほ笑んだ。

## 14 (後書き)

お待たせいたしました。

ようやく本当の両思いに…！

ああ、長かったです^^；

しばらくは平穏な日々が続く、かもしれないが(！)。

まだお互いのことをほとんど知らないふたり。

問題は山積み、障害は壁のよう！？

これまでと変わらず、応援してやってください^^

タクシーを降りても、有衣はまだどこかぼんやりとしていた。まだ、直輝とのが現実ではないような、そんな感覚が続いている。

それでも、と有衣は思う。

帰ってくるまでずっと見つめていた携帯に視線を戻すと、直輝のデータが映っている。

今までは、お互い携帯のデータを知らなかったが、さきほど交換したのだ。

そのメモリが、確かに現実のできごとだと証明している。じわり、と嬉しさがこみあげてくる。

家に向いていた体を、反対側に向け、みどりの家に向かった。

またしても、土曜の夜の有衣の訪問。

みどりは、またあの男か！と心の中で悪態をつきながら、玄関へ向かう。

けれどみどりの予想に反して、有衣は泣いてはいなかった。

むしろ、どこか夢を見ているような、そんな雰囲気すら漂っている。

「どうしたの」

「ごめんね、また夜遅くに来ちゃって」

「それはいいけど。とりあえず上がって」

有衣に先に部屋に行かせ、みどりはとりあえず飲み物を用意しようとキッチンへ向かった。

ベッドの端に座って待っていた有衣は、ドアが開いた瞬間、コーヒーの香りが漂ったのに気づく。

みどりがトレイにカップを2つ載せて、部屋に入ってくるのが見えた。

有衣は、その香りですきほどのことを思い出して、ひとり赤面してしまふ。

様子のおかしい有衣に、みどりは首を傾げた。

「みどり、どうしよう」

「…また、何かあったの」

「好き、だって」

「え？」

「直輝さんが、私のこと、好きだって」

その言葉にみどりは、ようやく有衣の様子がおかしい理由に納得する。

現実なのに、信じきれない気持ちのほうが大きいらしい。

みどりとしては、どちらかと言えば直輝のことはあまりよく思っていない。

有衣が前回のようにまた手ひどく傷つけられるのではないか、と心配でもある。

それでも、有衣の本気の想いを知っているだけに、嬉しそうな有衣を祝福してやらないわけにはいかなかった。

結局、有衣を幸せにできるのは、今のところ直輝だけなのだ、とみどりは自分を納得させる。

古典的だとは思ったが、現実だとわからせようと、みどりは有衣の頬をぐにゅと左右に引っ張ってやった。

「痛っ、痛い、痛いって！」

「痛かるう。夢じゃない証拠だね」

「…ひどいよ。ちょっと信じられないだけじゃん」

「でも、よかったじゃん。両思い」

「うん。ありがとう」

「で？　なんで、赤面してたのかなあ？　他に何かあったの？」

興味津津のみどりの追及に、有衣は洗いざらい白状させられる羽目に陥った。

と言っても、コーヒーマミれの密着と、告白しあった後の密着しか、

進展らしいものは無かったのだが。  
今まで恋愛ごとに疎い面のあった有衣としては、それだけでも大照れものだった。

みどりと話したことで、ようやく現実的に感じられるようになった有衣は、ようやく家に帰った。

有衣が廊下を歩いていると、ちょうど清香がバスルームから出てくるところだった。

「ただいま」

「遅かったわね」

「うん。帰りにみどりん家寄ってきた」

「どうだったの、お弁当の評判は？」

「大好評！ ハルくんも直輝さんも、慧さんと妙さんも喜んでくれた」

おや、と清香は知らない名前に内心首を傾げた。

2人分にしては大きなお弁当を作っていると、朝不思議に思ったのだが、どうやら誰かが来ていたらしい。

だが有衣の表情からすると、大変なことは無かったのだろうと思えた。

「なんだか、嬉しそうな顔してるわね」

「え！？」

有衣は咄嗟に大きく反応し、手で頬を抑えたが、その後あからさまにしまった、という顔をした。

清香は、これは何かあったな、しかも西岡 直輝絡みで、と予想する。

「ちょっと、いらっしやい」

清香のにつこりとした笑顔に、有衣は逆らえない。

笑顔の裏に、実は誰にも有無を言わせない凄味があるのだ。

結局、清香の追及にも有衣は堪えられず、関係が変化したことを白状した。

但し、みどりには話せた密着の件は、清香に言うのは憚られたため、割愛する。

「基本的に、有衣がいいなら私はそれでいいわ。

まあ、年頃の娘を持つ親の気持ちは理解してほしいところね。

これまで通り、外泊は許可制。遅くなるときは連絡すること。

相手が年上だからって、流されないのよ」

「わかってる。ありがとう」

案外あっさりと話が終わったことに、有衣は少しだけ拍子抜けしたが、安堵もした。

あまりにも年上だから、何か言われるかとも思っていたのだ。

話が終わると、もう休むと言って部屋を出ていく清香を見送りながら、有衣はほっと一息ついた。

自分の部屋に入り、バッグを下ろすと、中で携帯のライトが点滅しているのが見える。

青色のライトは、メール着信があったときのものだ。

もしかして、もしかして、と逸る気持ちのまま携帯を慌てて取り出す。

『無事に、着いたかな？』

目に飛び込んできた、直輝からのメール。

よく見ると、1時間ほど前に受信していた。

みどりのところにて、まったく気づいていなかったのだ。

『すみません。帰りに向かいの幼馴染みのところに寄ってて、遅くなりました。さきほど無事帰りました』

慌てて返信する。

初メールにしては、ちょっと色気が無さ過ぎる、と苦笑しているとすぐにまたメールが来る。

『それならよかったよ。遅かったから、ちょっと心配した。その幼馴染みって、もしかして“みどり”ちゃん？』

なんで、知っているのだらう、と一瞬思い、それからすぐに思い出

した。

あの晩、というか深夜に、みどりが携帯に電話をかけまくっていたのだった。

『そうです。その節は深夜に迷惑電話をかけていたようで、すみませんでした^^;』

『俺、挨拶に行ったほうがいいかな。菓子折り持って』

そんな、くだらないと言っているいい話が続いた。

メールを繰り返していると、今までになく親密になっていく気がして、有衣は嬉しかった。

少しでも途切れさせたくなくて、人生で初めて、お風呂場にまで携帯を持ち込んでしまった。

『明日は、どんな予定?』

『特には予定入れてません。直輝さんは、何する予定ですか?』

『そろそろ衣替えしようかな、と思ってるところ』

『あの、もしよかったら、手伝いに行きましようか?』

『実は、そう言ってくれるかな、と思って言ってみたんだ。来てくれる?』

『行きます』

『じゃあ、衣替えはまたにする』

『ええ?』

『日曜にも会えたらいいな、って思っただけなんだよ』

遠まわしだった誘い文句の割に、ストレートな最後の文章に、有衣の体温は一気に上がる。

日曜にも、いつでも、会いたいと思ってきているのだとわかって嬉しかった。

これ以上お風呂にいるままメールを続けていたら、のぼせてしまいそうだと有衣は手早く上がる。

部屋に戻って、眠る直前までメールは続いた。

『じゃあ、おやすみ』

『おやすみなさい』

その挨拶だけのメールも、温かくて、有衣はディスプレイを見てほほ笑んだ。

週明け、有衣は譲に報告するために、昼休みの終わりごろ屋上に向かった。

「うまくいっただろ？」

顔を見るなりそう言った譲に、有衣は驚きつつも苦笑した。

結局、帰りに譲が言った通り、素直に気持ちを伝えようとしたら、うまくいったのだ。

「どうして、わかったの？」

「ええ？ だってさ、ハルパパの俺を見る目がさ」

「目？」

「ジエラシー」

「じえ、…嘘」

「ほんとだよ。俺がちよっと近づいただけで、目力倍」

「目力って…」

相変わらず、譲と話していると少しだけ力が抜ける。

それにしても、どうして自分ではわからないことを、他人のほうがよく見ているのだろう。

直輝への気持ちも、まずみどりや清香さんに指摘されたのだ。

そして譲に言われなければ、直輝の気持ちを知ることできなかったに違いない。

恋をするというのは、意外と難しいものだ、と有衣は思った。

携帯がくぐもった音を立ててポケットで鳴り、有衣は慌ててスカートのポケットからストラップを引っ張り出す。

『もう休憩入ってるかな？ 俺はこれから』

直輝との、何でもないメールのやりとりが、既に有衣の日常に加わっている。

譲は、嬉しそうに返信する有衣を横目で見やっこっそりと溜息をついた。

「いいねえ、楽しそうで」

「何、その年寄りみたいな言い方…」

「俺も彼女欲しい」

「ごめんね、先に幸せになって」

「うわ、何気にむかつくんですけど。誰のおかげだよー。」

「つかさ、あんた絶対性格違う。俺の前と、ハルとハルパパの前と、絶対違うから」

「そうかな。…そうかも。年の差とかあるし。それに、愛の差？」

「あーはいはいはい」

「浮かれている、と有衣は自分でも思う。」

「こんな軽口は、譲の前といえども以前の有衣であればほとんど叩いたりしなかった。」

「そんな自分自身の変化は、有衣の中に少しの戸惑いを生じさせつつも、どこか悪い気はしない。」

「覚え始めたばかりの両思いの恋は、今の有衣にとってはただただ楽しいものだった。」

## 15 (後書き)

付き合い始めの、バカップルです。

お風呂まで携帯持ち込んでメールとか、やりましたねえ… (遠い目)

。それでたまに湿気で携帯壊れたりとか^^;

まあ、何はともあれそんなラブな日常に突入した直輝と有衣です。

書きながらちょっと思ったのは…、清香さんの対応は妥当なのか、ということ。

親の立場からすると、どうなのかな〜と思いつつ、応援してくれるほうがいいなあ、と思って書いちゃいました。

もうちょっと、平穩ライフは続く予定です。

最後の患者を見送り、直輝は座ったまま両腕を斜め後ろに大きく伸ばす。

今日はこの後カンファレンスも入っていないし、いつもより少しだけ早く帰れそうだ。

直輝は、いそいそと引き出しから電源の入っていない携帯を取り出すと、立ちあがって出て行こうとした。

が、またしても冷気を纏った白井が立っている。

「…今日は、ミスは無かった、と思うんだけど」

年下の看護師に言う言葉としては、かなり情けないと思ったが、如何せん相手は白井である。

強気に出たところで、口で敵えるとも思えない。

「大有りです。しかも今日だけじゃないですよ。…その顔！」

「え、顔？」

「ずーっと笑顔、ってどうなんですか。病状聞く時くらいマジメな顔してください」

「あ、ごめんね」

「だから毎回、私に謝られても…。いえですから、先生先週からまた変ですよね。」

なんていうか、以前のウキウキ具合の比じゃないです。むしろ逆に怖いぐらいなんですけど」

「そうかな？ 実はね」

「あ、お話は結構ですよ。これ以上顔が戻らなくなると困りますから。じゃ、お疲れ様です」

言いたいことだけ言って、さっと身を翻して歩き出した白井に、直輝は開きかけていた口を斜めに歪めた。

実を言うと、直輝は白井に有衣のことについてかなり話してしまい

たかった。

特に意味はなく、ただ単に話してみたかった。正直なところ、直輝には気が置けない友人が少ない、というよりも現在ほばいないに等しい。

と言っても、直輝の人柄に問題があるというわけではなく、成り行き上そうなってしまっただけのことである。

学生時代は、唯と慧に加え、サークルの仲間たちも周りにいた。

しかし卒業後大学病院に勤めるようになってからは、医局内での摩擦に疲弊し、友人関係を諦めた。

そこで、直輝のすぐ近くの友人といえば、また唯と慧のみとなった。そのうち唯と結婚した後は、慧は親族となったため、友人と呼べる関係の人間はいなくなってしまったのだ。

その上、唯が体調を崩した後は唯と晴基にかかりきりになり、たとえ望まれても付き合えなくなった。

だから今のところ、有衣のことについて話せたのは、つまり慧だけなのだ。

悲しいかな上下関係が成り立っていない白井のなら、友人とまではいなくても話せそうな気がしたのだが。ばつさり斬られてしまった。

直輝は、ここまで浮かれている自分が、自分自身でも確かに相当に意外ではあった。

唯を亡くした後凍結していた感情が、有衣によって融かされたその反動は、思ったより大きいらしい。

そもそも顔がミスだ、という白井の言葉を思い出し、直輝は自分の頬を両手で擦ってみる。

だが効果はそれほど無く、表情は浮かれたまま、直輝の足はロツカールームへと急いだ。

急いで外へ出ると、ようやく携帯の電源を入れる。

午前中はかなり患者が多く、昼の休憩はほとんど無いに等しかった。

おかげで今日は病院に入ってから一度も電源を入れられなかった。いつもなら休憩時にメールのやり取りをできるのだが、そういうわけで今日はまだ有衣のメールを見ていない。

送ってくれていることが前提なんて、傲慢だろうか。

一瞬そう思ったが、溜まっていたメールがすぐに受信を始め、そんな思いはすぐに消えた。

『お昼休みです。屋上でお弁当です。直輝さんも屋上でしょう？』  
建物の中は携帯の電源を入れられないため、直輝は最近ずっと屋上で休憩時間を過ごしている。

肌寒くなってきたから無理しなくてもいい、と有衣は言うがそうではなく、直輝が我慢できないのだ。

メールのやり取りが日常に組み込まれた今、空いている時間ができると携帯をいじりたくなる。

だから、どうせ電源は入れられないにも関わらず、デスクの中に閉まっておくのだ。

いちいちロッカールームに行かずに済むように、空いた時間にすぐに持って外に行けるように。

しかし直輝が屋上に出るのを止めないと知ると、今度は有衣までもが屋上に出るようになってしまった。

なんとなく同じことをしていると嬉しいから、と言われた時には思わずむぎゅっと抱きしめずにいられなかった。

ああ、思い出しただけで顔が緩む。

白井がここにいたら、先週からずっと緩みっぱなしです、とか冷たく言われるに違いない。

冷たい視線を思い出して身を竦め、直輝は次のメールを開く。

『直輝さん、忙しいみたいですね。今日は空がキレイですよ』

今度のメールには添付ファイルがあり、開いてみると有衣が撮ったらしい空の画像だった。

雲のほとんどない、真っ青な空だ。

外に出られないと思って、送ってくれたらしい。

とうに日は暮れ、ネオンの光が煌々とする時間に、昼間の空を見られるとは思わなかった。

有衣はやはり、心をあたたくほっとさせるのに長けている。

『あーやっと一日終わりましたあ。これから一度帰って、ハルくんを迎えに行きます』

直輝はここで、おやと思った。

直輝の知らない有衣の別の生活が、垣間見えたような気がしたからだ。

今日は直輝からの返信が無かったため、有衣が好きな内容で一方的にメールを送ってきている。

そのせいか、今まで送って来たことの無い、このような行動パターンを送ってきたらしい。

直輝ははたと、有衣が日中何をしていて夕方にやっと終わったのか、どこへ帰るのか、知らないことに気づく。

そういえば、有衣は直輝のことを家の中まで知っているが、直輝は有衣のことをほとんど知らない。

それどころか、知らないことのほうが圧倒的に多い、と気づいて直輝はしばらく立ち竦んでしまった。

「大丈夫か？」

急に後ろから声をかけられ、直輝が驚いて顔を上げると、慧が立っている。

「いつから…」

「いや、さつきから。携帯見ながら百面相やつてるからどうしたものかと」

見られていたと思うと、直輝は軽く狼狽する。

慧も妙も、有衣のことで何かとアドバイスをくれるが、まだ完全に遠慮が抜けきったわけではなかった。

有衣からのメールだと言ったわけではないが、慧のことだ、気づいているに違いない。

「また何かあったのか」

「いや……」

「……遠慮は抜きでな」

慧の、念を押すような声色に、直輝は苦笑した。

やはり、何もかも見通されているようだ、慧には隠し事は通用しない、と改めて思う。

「特に、何かあったわけじゃないんだ。

ただまあ、気づいてみると、あの子のことを全然知らない自分について、ちよつと考え物だなと」

「たとえば？」

「昼間何やってるのか、とか。家はどこか、とか。そういうこと」  
「昼間、って……」

慧は口の中で小さく呟いたが、すぐに言葉を切った。

呟いた声は小さすぎて、直輝の耳には届かなかったようだ。

慧は、その事実にあ堵する。

直輝が知らないことを、自分が知っているということを取られてはならない。

それにしても、と慧は内心で大きな溜息をつく。

直輝は、本当に何も知らないらしい。

今のふたりは完全に、想いだけが先行している関係になってしまっている、ということだ。

この分では、当然有衣も知らないことが多いのではないかと慧は心配になる。

「ひとつ聞いてもいいか」

「何だ？」

「あの子は、名前のことを知ってるのか」

「名前？」

直輝は、まさかと内心ぎくりとしたが、平静を装うふりをして鵲返しに聞いた。

晴基の運動会の時、慧と妙に対し、直輝は有衣のことをただ“川名

さん”とだけ紹介していた。

自分が最初に受けた衝撃を覚えていたので、特に妙を氣遣って名前をわざと言わなかった。

それにどうしてか晴基も、あの日はいつもの“ゆいちゃん”という呼び名を使わなかった。

恐らくあの日は、“ママになってもらう日”だったからだ、直輝は予想している。

直輝自身も、名前を呼ばないように注意もしていた。

だから、慧が有衣の名前を聞いていたとは思えなかったのだが。

「…唯と、同じ名前だつてことを、知ってるのか」

「どうして…、お前は知ってるんだ」

「質問を質問で返すなよ。…俺は、まあなんだ、成り行きだな。それで、どうなんだ？」

「俺は言っていないから、知らないはずだ」

「もし知ったら、どうなると思う？」

「どうつて…」

多分、自分が感じたのと同じようなショックを受けるだろう、とは思った。

だが慧がこうまでして聞いてくる意図が、正直よくわからない。

「同じ名前だから付き合った、と思われる可能性は考えたのか」

「俺はそんなんじゃない」

「お前はそうだとしても。女はそういうの過敏だろ」

直輝は、何も言い返せなかった。

よく考えれば十分にあり得る話なのだが、そんなことは、深く考えたことが無かった。

黙り込んだ直輝に、慧は思いやるような視線を向ける。

「いずれにしろ、お前たちはもう少しいろいろ話し合ったほうがいい。」

あの子にしろ、お前にしろ、思ってもいなかったことを思いもよらない時に知るの、よくないだろう」

「…そうだな」

「ま、追々がんばれよ」

慧は、直輝の肩を軽く叩くと駐車場へ向かって歩き出した。

直輝はしばらく放心していたが、携帯に目を戻して残りのメールを  
読むと、肩の力が抜ける。

『今日の夕食は、ふわとろお好み焼きです！ 早く帰ってきてくだ  
さいね^^』

今度は晴基が口の周りを汚しながらおいしそうに頬張っている画像  
が添付されている。

直輝は思わず笑みをこぼし、慧の言葉を胸の隅に無理矢理しまい込  
み、タクシープールへ歩き出した。

## 16 (後書き)

直輝もかなりの浮かれようです^^;

ちなみに病院支給のPHSは、Eメール機能は付いていないため、業務中の有衣とのメールのやり取りはできないのであります。

多分真冬になっても屋上に行くと思われませう(笑)。

しかし、今のところ直輝よりも情報を持っている慧は心配そう…。

確かにこのふたり、いつも一緒にいる割にお互いのこと知らなすぎなのです。

今後、その辺りを書いていきたいと思えます。

有衣は走っていた。

もう日も落ちて、辺りはかなり暗くなっている。

いつも晴基を迎えに行く時間よりも、1時間ほど遅い。

ようやく門にたどり着きボタンを押すと、譲ののんきな声が聞こえてきた。

「遅かったねえ。今連れて行くよ」

学校を出てくるとき、譲の姿を見かけていたから、譲も有衣を見たのだろう。

ここよりも有衣の家のほうが学校からかなり近いのだが、家からここまで距離と合わせればそう変わらない。

しかも制服を着替えた時間分ロスした、と有衣は着替えてから来たことを後悔した。

今、有衣の学校は学園祭前の準備でかなり忙しくなっている。

有衣のクラスは、俗に言う“コスプレ喫茶”をすることになった。

と言っても、風紀にあまり緩くない学校であるため、きわどいものは無い。

スクール系の服、メイド服、ナース服、和服といった露出の少ない無難なものでまとめられている。

低予算のため、着る服は自分たちで用意する、という無茶な要求が出されており、放課後が忙しい。

和服は親に、学ランは男子に、ブレザー系の制服は他校生に借りれば済む。

だが他の服は有衣を含めた裁縫の得意な女子たちで、目下制作中なのである。

「有衣ちゃん？」

かなり近くで直輝に名前を呼ばれ、有衣ははっと意識を戻した。同時に、肉の焦げ付いたにおいが鼻をつき、顔を顰める。

「う、わっ！ す、すみません！」

慌てて火を止め、フライパンをコンロから下ろす。

煙すら立っているフライパンの中身 元はハンバーグだった は、底に接していた面が黒く焦げ付いていた。

「あ、ああ……」

意味もなく、情けない声が有衣の口から出ていく。

挽き肉は使いきってしまったため、タネはもう無いのだ、どうしようもない。

毎日使うものだけを買うため、冷蔵庫にも野菜はあるがメインとなる食材は無いに等しい。

何が代りに作れるだろうか、と有衣は考えたが、何もなさそうだという結論に達してうなだれる。

有衣のあまりにも情けなさそうな顔に、直輝は思わず軽く吹き出してしまう。

「大丈夫だよ。上半分は食べられそうだし」

「すみません……」

有衣はなんとか上半分を切って盛り付けると、その後はフライパンの後処理に奮闘した。

半分だけのハンバーグを食べながら、有衣はどうも、かなり疲れているらしい、と直輝は思った。

有衣がぼーっとするところは今までにあまり見たことがなかったし、家事で失敗したのも初めて見た。

毎晩遅くまで拘束していることを自覚してはいるため、こっそり溜息をつく。

とりあえず、今晚だけでも少し早めに帰してあげたほうがよさそうだ。

そう思いながら、今晚だけか、と自分でツツコミをしつつ、本当に溺れているようだ和我ながら苦笑う。

食べ終わった頃、フライパンをきれいにし終えたらしい有衣が、テーブルに近づいてお茶を入れてくれた。

「なんだか、疲れてるみたいだね」

「あ、ちよつとだけ…。今日の夕食はほんと、ごめんなさい」

「それはいいから。今日は、ちよつと早めに帰って、ゆっくり休んだほうがいい」

「え…」

途端に、有衣の顔は不安げな表情を浮かべる。

それを見て直輝は、今の言い方は早く帰って欲しいと言ったようであまりあつた、と焦つた。

そつと有衣の腕を掴み、直輝は膝の上に有衣を座らせる。

「ほんととは、帰つてほしくないけどね。疲れてるようだから、心配なんだよ。…わかる？」

言い聞かせるようにゆっくりと言うと、有衣はようやく頭を縦に振る。

腕の中の有衣はおとなしい。

有衣はいつもこうだ。

ほんの少しの接触でも照れたように頬を染め、口数が極端に減る。

緊張がこちらまで伝わるのだが、それでも嫌がっているわけではなく、おとなしくされるがままにする。

もしかすると、恋愛経験が極端に少ないのかもしれない、と思う。

タクシーを呼んで待っている間、直輝は有衣に小さなキスを繰り返していた。

そして時間が来ると、玄関まで手をつないで歩き、最後にひとつキスをして、別れる。

ドアが閉まると、直輝は腕の中の軽い喪失感に溜息を漏らした。

タクシーの中で、有衣はまだ熱い頬を押さえていた。

まだ、直輝の感触が残っているような気がして、動悸が納まらない。触れられるのは、もちろん嫌ではない。

ただ、まだ慣れていないだけだ。

今まで過ごしていた直輝との穏やかな時間に、少しだけ恋人としての時間が加わったことに。

それでも、嬉しくて満ち足りた気持ちになるのは間違いない。

家に着くまでの間、有衣はぼんやりと直輝のことを頭の中で反芻した。

翌日も、有衣は忙しさに追われ、気づいた時には既に外は暗くなっていた。

時計を見ると、あと数分で6時半になるところで、昨日より遅い、と有衣はぎよっとする。

今手がけていたものは、あともう少しで完成するのだが、晴基をこれ以上待たせるわけにはいかない。

有衣は作業をそこで切り上げ、急いで帰り支度をした。

「ごめん、先帰るね」

「んー明日ねー」

作業中の子たちは、顔を上げず挨拶だけくれる。

その脇を走り抜け、昇降口まで駆け下りて行った。

今日は、もう着替えに戻る時間も無い。

有衣は清香さんに連絡メールを打つと、大きな荷物を抱えたまま、いつもとは別の方向へ駆け出した。

「あれ、制服だ」

晴基を連れて出てきた譲が、驚いたように言う。

譲はいえ、とうに着替えたようで、いつもの“武先生スタイル”になっている。

「遅くなっちゃって。直接来たの」

「あーなんか大変らしいって聞いた。自分たちで衣装作ってんだってね」

「しばらく遅くなっちゃいそう」

「まあ、うちは大丈夫だけど。ハルは寂しいよな」

「ゆいちゃん、おそいの」

「ごめんね。できるだけ、急いでくるからね」

晴基は、うん、と頷きながらも、繋いでいないほうの手でスカートをぎゅっと握っている。

かわいそうになってしまい、空いている手で頭を撫でてあげた。

「やっぱ、変な感じ」

「え？ 何が？」

「学校で会うときは普通だけど。制服着てハルママしてんの、ちょっと違和感」

「…変？」

「いや、慣れないだけ」

「ゆいちゃん、かわいいおようふくだね」

「あっ！」

有衣はかわいく褒めてくれた晴基に頬笑み、焦ったように声を上げた譲をじろりと睨みつけた。

また例のイロゴトレクチャーをしてくれたらしい。

今度は多分、女の子が新しい服を着てきたら何たら、というものに違いない。

だから晴基は、見たことの無い制服を見て、かわいいと言ったのだ。

「譲くんさ、ハルくんに変なこと教えるのやめてよね」

「別に変なことじゃねえって」

「おとこの、た、たいなみ！」

「嗜み」

「たし、なみ」

「ちよつと！ 保育園で教えることじゃないでしょ、それ」

「あのね、たけせんせい、ものしりなんだよ」

慌てる有衣の脇で、晴基は譲を尊敬のまなざしで見上げている。こりゃダメだと有衣は諦め、譲に手を振ると、晴基の手を引いて歩き出した。

そういえば、制服で来たのは初めてだ。

晴基が見たことが無いのだから、つまり直輝も見ることが無いということだ。

そう考えると、有衣はなんとなく気恥ずかしいような気がする。

そして、いつも来るスーパーの入口に来て、入ろうとしたが躊躇してしまった。

ここでは晴基と有衣は親子として誤った認識が定着している。

そんな場所に制服で入ってしまったら、変に思われるだろうかと急に心配になったのだ。

「ゆいちゃん？」

「あ、何でも無いよ。行こうか」

思いきつて入ると、いつもと時間帯が違うせいか、いつもの店員はいなかった。

思わずほっとした自分に気づき、有衣は慌てる。

結局のところ、心の中の願望は、変わっていないのだとわかってしまったからだ。

何とか頭の中から振り払おうと、有衣はいつも以上にてきぱきと買い物した。

玄関に入った直輝は、見慣れない靴に首を傾げた。

今まで有衣が履いていたのは、ブーツやスニーカーなどが多かったのだが、今日はローファーが置いてある。

ローファーなんて、周囲で見なくなつて久しい。

もしかするとローファーを履くファッションが、今頃流行っているのかもしれないし。

もともと世間に疎くなつている自分にはよくわからない、と直輝が

軽く笑ったとき有衣の気配がした。

「おかえりなさい」

「ただい、ま……」

顔を上げて言いかけた言葉は、途中でいったん途切れ、不自然な間が入ってしまった。

呆気に取られ、身動きできないまま有衣に鞆を引き受けられる。

「お風呂準備できてますよ」

「あ、…ありがとうございます」

いつものように柔らかな笑顔をくれてから、有衣はリビングのほうへ歩き出した。

強烈な違和感。

直輝は、無意識に後ずさりして、背中をドアにぶつけた。

もう一度、ローファーに目を向ける。

「制、服……」

目にしたものが信じられず、直輝は一瞬、“コスプレ”という言葉  
を思い浮かべた。

しかし結局、ひどい現実逃避だ、と頭を振る。

目にしたものは、確かに現実だ。

薄いクリーム色の生地に紺の襟、白いライン、紺のリボantai、濃紺のボックススカート、紺のハイソックス。

そして、中襟にあった校章とポケットに付いていた名札が証明していた。

有衣は、高校生だ。

その事実には、直輝は思わず両目をきつく瞑り、右手を口に当て、呻くように息を吐き出す。

しまい込んであった慧の言葉が甦り、頭の中で何度も響いていた。

17 (後書き)

直輝、シヨッキング!

というわけで、新たな問題発生です。

直輝は一応、常識人なので、これは意外と衝撃大だと思われます。まさか高校生相手に恋愛をしていたとは思わなかったんですね。

前半のあまあま具合から、急激に暗雲が立ち込めました。

またまた波紋(?)の展開へ突入です!

いざ (楽しんでる私:^^;) )

入浴すれば少しは頭もすっきりするかと思ったが、期待していたほど効果は得られなかった。

相変わらず慧に言われていた言葉が、直輝の頭の中を歩き廻っている。

しかもダイニングからキッチンがよく見えるし、中で働く有衣のこともよく見える。

セーラー服の上のエプロンが、アンバランスで目の毒だ。

直輝は慌てて目を逸らし、目の前の食事を早く終わらせようと集中することにする。

いつもは食べているときテーブルと一緒につくが、今日はキッチンで何かやっておきたいことがあるらしい。

今日の有衣は、忙しそうにキッチンの中で動き回っている。

習慣から外れほんの少しの物足りなさを感じつつも、今日に限って言えば、直輝は助かったと思う。

まだ、頭が混乱している。

有衣が、高校生だということなど、知らなかったのだ。

確かに、自分よりもずいぶん若いとは思っていた。

少なくとも5歳以上は年下だとも思っていたが、社会人だと思っていた。

高校生が派遣会社を通して、しかもハウスキーピングに来ることなど、一般的見地からしてもあり得ない。

そこで直輝は、慧が有衣の名前について知っていたことを唐突に思い出した。

成り行き上知った、とは言っていたが、その成り行きとは何だったのだろう。

慧の口振りからして、知っているのは名前だけではなさそうだ。

あの時言っていた“思ってもいないこと”とは、年齢のことだった

に違いない。

だから直輝に、もう少し話し合いが必要だ、と促したのだ。

直輝はテーブルに両肘をつき、両手で目のあたりを覆って溜息を吐きだした。

有衣は、キッチンの中から直輝の様子を時折盗み見ていた。

今日の直輝は、帰ってきたときから少しおかしい。

有衣を見たとき、直輝が硬直し、その目が少しだけ泳いだのを、有衣は気づいていた。

なんとなく不安が有衣を襲ったが、気づかないふりをして鞆を受け取りリビングへ歩いたのだ。

有衣がキッチンへ入ってしばらく経ってからようやく、直輝がバスルームへ向かう音がした。

そして食事を食べ始めても、途中で何度かぼーっとし、また食べ始める、その繰り返しだ。

食べ終わった今は、完全に頭を抱えてしまったかのような姿勢になっていた。

病院で何かあったのか、それとも知らないうちに自分が何かしてしまったのか、よくわからない。

とりあえず疲れているだけかもしれない、という可能性を考えたが、それも自信は無かった。

器が置かれる音とあたたかな温度が伝わり、直輝は顔を上げる。

テーブルの上には、いつもの緑茶ではなくティーカップに入った紅茶が置かれていた。

視線を上げ、有衣の顔を見るとどこか心配そうな表情だった。

「あの、なんだか疲れてるように見えたので…」

「紅茶？」

「ちよつとだけリンゴ酢とはちみつ入れたので。疲れが取れるかな、って思つて」

いつもと変わらない有衣の優しさが、直輝を包み込む。カップに口をつけると、ほんのりまったりとした味わいが、温かさと一緒に全身に沁み込んだ。

「ありがとう」

お礼を言つと、有衣は嬉しそうにふわりと笑った。

かわいい。触れたい。抱きしめたい。

直輝の中に、そんな想いがざわざわと駆け巡る。

だが今日は、目の前にある制服が恐ろしい抑制力となり、それを行動に移すことはできなかった。

帰りのタクシーを待つ間、直輝と有衣はソファで隣り合って座る。

いつもは少なからずあるスキンシップも、今日は直輝が仕掛けないために、何も無い。

有衣は何か言いたそうな表情を一瞬したが、それでも隣に座っていることで満足しているようだった。

直輝は、有衣のスカートをちらりと見てから、重い口をなんとか開く。

「何年生？」

「え？ 3年ですよ？」

「そう……」

有衣は、今さら何を、というような、質問自体を不思議なものと感じたような顔をした。

直輝はその意識の違いに、曖昧な笑顔を浮かべる他ない。

どうしたものか、と思い悩むうちに、ふたりの間には沈黙が落ちる。直輝が疲れていると思っっているため、直輝の口数が少なくて、有衣もあまり話そうとしなかった。

やがて時間が来ると、直輝は有衣を見送るために立ち上がる。

だが、有衣がいつものように手を繋ぐのを待っている気配に、直輝は内心頭を抱えた。

リビングから玄関までの、短い距離だ。

しかし、今の直輝にとっては、とても短いとは思えない。

それでもそうしなければ、直輝の考えていることなど何も知らない有衣を傷つけてしまうだろう。

有衣を傷つけないために妥協した直輝は、有衣の手を取って玄関へ向かう。

そして、玄関に到着した直輝は、別れの挨拶代りにこれまでしていたことに気づき愕然とした。

視線は自然と、有衣の唇へ落ちる。

有衣もうつすらと頬を染めて、まるで儀式のようにキスを待っている。

顔を近づけると、有衣はきゅっと目を閉じた。

その瞬間、直輝の脳裏に“淫行”の文字が鮮明に浮かび上がり、直輝はぎくりと硬直した。

そして目をぎゅっと瞑り、観念したように、有衣の唇ではなく額に軽くキスをする。

繋いだままの手が、異常に汗ばんでいるような気がして、直輝は気がでない。

いつもと違う突然の額へのキスに、有衣は一瞬拍子抜けしたような顔をした。

そしてそれから、それを恥じらうように笑い、額を手で押さえる。

「あの、おやすみなさい……」

「うん。おやすみ。気をつけて……」

名残惜しげに手を離し、有衣はドアの向こうに消えた。

ドアが閉まると、直輝は壁に背を当てながらずるとしゃがみ込んだ。

直輝を襲ったのは、もっと触れたいという強い衝動と、そしてそれを遥かに上回るひどい罪悪感だった。

恋愛経験が少ない、どころではない。

有衣は、完全に初めてなのだ、と直輝は確信した。

額にキスした後の反応が、その確信と相まって、直輝にさらに罪悪感を抱かせる。

有衣が物足りなさを感じたのは、自分が教え込んだせいだ。付き合い始めてからの数週間で、もう何度キスをしたか知れない。その度に腕の中でおとなしくキスを受けていた有衣の表情を思い出し、直輝は眩暈がした。

30の男が、高校生相手にすることではない。だがそれでも、触れてしまいたい。

衝動と理性の凄まじい闘ぎ合いに疲れ、直輝はしばらく立ち上がることができなかつた。

ベッドに入っても、有衣はなかなか寝付けなかつた。

今日の直輝は、やはりどこかおかしかつた。

口数は極端に少なく、ほとんど全くと言っていいほど、言葉を発さなかつた。

それに、手を繋ぐのを一瞬躊躇っていたようにも見えた。

しかも、キスも無かつた。

そこまで考えて、無意識のうちに指で唇をなぞっていた有衣は、一気に頭に血が上ってしまう。

誰も見ていないのに急に恥ずかしくなり、体をうつ伏せて枕に顔を突っ伏した。

恥ずかしい、恥ずかしい。

これでは、まるでキスが欲しかつたみたいだ。

いや、本心を言えば、本当は、欲しかつた。

直輝はいつも、有衣が緊張しているのに気づいて、余計な力が抜けるまではそつと掠めるようなキスをする。

それから有衣が慣れてくると、今度は唇を食むように、まるで味わうように、熱い唇と舌が触れる。

最初の頃びくびくしていたのに、今ではそれを望んでいる自分に時々気づく。

そんなことを思い出していると耳まで熱くなってきた。  
有衣はごろりと仰向けに戻ると、今日ひとつだけもらったキスの跡、額を手で触れる。  
帰る時のキスも、なぜか唇でなく額にだった。  
それが少しだけ物足りないような気になってしまったのは、やはり自分がキスを望んでいるからだだろう。  
でもたまには、こんなのもいいのかもしれない。  
どちらにしても、幸せな気分を分けてもらえるのは変わらない、と思った。

翌朝、直輝は出勤すると真っ先に慧の部屋へ向かった。

入ってきた直輝の顔を見ると、慧は大体の事情が掴めた気がして苦笑する。

「お前、知ってたんだな」

「…高校生だつて？」

慧の答えに、直輝は溜息をついた。  
頭痛がする。

ゆうべは、平日は飲まないはずのビールを遅くに飲んでしまった。  
おまけに朝までろくに寝付けもせず、今日のコンディションは最悪だ。

「どうしてわかった？」

「…制服、着てきた」

地を這うようなテンションの返事に、直輝の衝撃の大きさを思い、慧は直輝を哀れに思った。

直輝は良くも悪くも真面目で真っ直ぐな男だ。

父親が厳しかったせいも、直輝も常識や良識に忠実で、それから外れることが嫌いだ。

だから大学病院の体質が合わず、医局内でも孤立することが多かった。

自己抑制の傾向も強い直輝に、有衣が高校生だったという事実は、

かなりの苦痛だったに違いない。

「それで、どうするつもりなんだ」

直輝は、こめかみのあたりに指を置き、目をきつく瞑っている。

慧はそう尋ねながらも、直輝の答えは恐らく予想の範囲を超えない、  
と思った。

そして、その通りだった。

「…無理だ」

苦しそうな直輝の声が、部屋全体にどんよりと浸透した。

18 (後書き)

常識人直輝、苦しんでいます。

思わず、無理とか言っちゃいました！

好きなのに。大切なのに。

でも多分そこら辺は、慧が何とかしてくれるでしょう^^；

そしてその直輝の不審な態度に、今後有衣は何を思っているのか…。

まだもうしばらく、雲は晴れません。

手の中の携帯が震え、メールの着信を知らせる。

休憩時間になると、直輝はいつものように屋上に上がったが、メールを打つことができないでいた。

文章を入力してみても消し、の繰り返しで、結局送れないままだ。有衣はまた、直輝が忙しくて休憩を取れないと勘違いしたらしく、適当なメールを送ってきている。

順番にメールを開きながら、直輝は慧との会話を思い出した。

あの時思わず、無理だと言ってしまった。

だが口に出した瞬間、直輝は何とも言えない苦い気持ちに襲われた。直輝の中では、理性が承認を出す一方で、感情は猛烈に抗議していた。

無理だと言ったところで、本当に手放せるだろうか。

それこそ、無理ではないのか。

いや、それよりも、本心を言えば手放したくないのだ。

身動きの取れなくなった直輝を見て、慧はやれやれと溜息をついた。直輝がここまで苦しむこと自体、直輝の気持ちに既に固まっていることの証だろう、と慧は思う。

「ったく、あんまり真面目なものも、考えもんだな。お前が俺なら、若くてかわいくてラッキー、で済む話なのに」

おどけたように言う慧を、直輝は軽く睨みつけた。

だが慧は直輝の性格をよく知っているし、本当はかなり同情と心配をしてきている、とわかっている。

「俺からすれば、お前も正解はもうわかってて、あとはどう折り合いをつけるか、ってことだろう」

慧の言葉は、間違っていない。

確かに、どう足掻いたところで、結局のところ有衣を手放せないことは、直輝もわかっている。

実際、有衣がいない生活など、もう想像することさえ困難なのだ。ただ、今はまだ直輝の中で整理が付かない。

考えるのに疲れた直輝は、少しだけ脱線して気になっていたことを尋ねた。

「そういえば、名前といい年といい…なんで知ってたんだ」

「あー、成り行き上」

「それは、前も聞いた。その成り行きが、気になる」

「…あの子の幼馴染みってのに、会った」

直輝の中に、すぐにみどりの名前が思い浮かぶ。

「もしかして、みどりちゃん、か？」

「お、なんだ、知ってたのか」

「名前だけ」

「もともとお前に会いに来たんだ。お前に早退させて俺が外来代わってた日」

そう聞いて、直輝はぎよつとした。

深夜に何度も電話をかけてきた相手だ。

病院にまで来たとは驚いたが、それも納得する。

しかしもし実際にそのとき対面していたとしたら、一体どんな事態になっていたのか、と想像すると恐ろしい。

おそらく有衣のためなら何でもするような、そんな子なのだろう。

一度も会ったことはないが、直輝はなぜかみどりに恨まれているような気さえして、妙な気分になった。

微妙な表情を浮かべる直輝に、慧はあっけらかんと言いつつ。

「心配しなくても、そっちは俺がどうにかするけど」

「…は？」

直輝は、慧の言葉のどこに反応すべきか迷う。

だが後半部分は些か問題ではないか、と思えば慧を見ると、少しだけ

癖のある笑顔を浮かべていた。

その表情で、なんとなくだが事情を察しかけて直輝は溜息をつく。

「お前の性格が、今だけ羨ましいかもしれない」

直輝の複雑極まりない心情を察した慧は、軽く噴き出した。

また携帯が震えた。

ぼんやりとしていた直輝は、携帯に目を落とす。

『仕方ないんですけど。直輝さんとメールできないと、ちょっとだけさみしいです』

時計を見れば、もうすぐ13時15分になろうとしており、有衣の昼休みの時間はもう終わる。

日中メールできるのは、昼のこの時間帯のみなだけに、素直な有衣の言葉は、真っ直ぐに直輝の胸を衝いた。

生じる小さな切ない痛みが、どうしようもなくいとしい存在なのだと、訴え続ける。

『ごめんね。午後の授業も、がんばって』

やっとのことで、こんなつまらない文章だけ送った。

授業、と打つところで、何度も指が止まりかけたが、なんとか堪えた。

慧のように、常識に囚われない見方をすぐにできない自分が、疎ましかった。

答えがわかっているのに、そうできないことが、もどかしい。

今日も今日とて制服姿で働いている有衣を横目で見ながら、直輝はこっそり溜息をついた。

なんとか免疫が付いたのか、ここ数日で最初の日よりは自然な振る舞いができているのではないかと思う。

しかし、これから後、有衣が帰るまでのふたりの時間は、そうもいかない。

だが今日は運が味方をした、ように見える。

有衣が、今日は早めに帰ると言ったのだ。

残念に思う面もあったが、どちらかというところとほっとした気持ちのほうが大きかった。

「直輝さん、やっぱり疲れてるみたいですよ。顔色悪いし…」

最近寝不足で、しかも悩んでもいたから、当然だろう。

自覚のあった直輝は曖昧に笑いながら、早く帰ろうと思わせたことに、ちくりと良心が痛んだ。

「…ごめんね」

「いいんです。今日は、ゆっくり休んでくださいね」

いつもよりも大分早い時間。

タクシーの到着時間に合わせて、玄関までいつものように見送る。

直輝は今日も、儀式のようにキスを待つ有衣の、額にひとつだけキスを落とした。

ドアが閉まると、直輝にかけた明るい声とは対照的に、有衣は足取り重く歩き出した。

エレベータに乗りこみ、景色がだんだんと下がっていくにつれ、光がじんわりと滲んで見えてくる。

ここ数日間、直輝の態度は、相変わらずおかしかった。

今日はわざと試みに、早めに帰ると言ってみただけだったのに、明らかにほっとしたように見えた。

それに加えて最近ずっと続けている、ぎこちない手繋ぎに、躊躇いがちに額に落とされる最後のキス。

疲れているのではなくて、まるで、一緒にいたくないみたいだった。ぎゅっと目を瞑ると、有衣の目からぼろりと涙がこぼれる。

エントランスを出てタクシーを見つけると、有衣は慌てて目元を拭いた。

窓の外を流れる景色を見ながら、有衣は考えていた。

直輝がおかしいのは、学校の帰りが遅くなったあの日からだ。

その日、直輝が帰ってきたときの、有衣を見て、硬直したあの顔、泳いだ目。

それから、触れるのにいちいち躊躇いを見せるようになった。何が原因だろう。

いつもと違ったのは、何だっただろうか。

そこで、有衣はたと気づいた。

「制服…？」

確かに、今まで直輝と会うときにはいつも普通の服だったから、制服で会ったのはその日が初めてだった。

隠していたつもりはないけれど、直輝は自分が高校生だとは知らなかったのかもしれない。

そういえば、何年生か、聞かれた。

そして、その日から今日までずっと、有衣は学校から直接制服のまま来ている。

そこで有衣はようやく、自分が直輝から子どもだと思われたのだ、ということに気づいた。

自分ではどうしようもないことで、直輝が離れて行ってしまうような気がして、有衣は茫然とした。

お決まりのように、有衣はみどりの部屋へ行く。

だが今日のみどりは、いつもと様子が少し違って、どこか苛々しているように見えた。

「なんか、あつたの？」

「…あつたには、あつたけど。ありえないから、無視。」

それより、なんかあつたのは有衣のほうでしょ？ またあの男に何かされたの？」

有衣は、いつになく刺々しい雰囲気のみどりに首を傾げたが、言いたくなさそうだったのでそのままにする。

「何にもされない」

「はあ？」

「…高校生だと、ダメなのかな」  
「どういこと？」

最近の一連のできごとをみどりに話すと、みどりは考え込んでしまった。

「まあ、確かにうちらは子どもだね、あの人からすれば」  
「うん…」

「でも、別れようとかは言われてないんでしょ？」

「言われてないけど。や、やだよそんなの…」

「あ、ごめんごめん。確認しただけだよ、泣かないでよ」

「う…ごめん」

考えただけでも、泣けてしまうのは、本当に本当に、好きになり過ぎていてからだ。

以前の片思いをしていた自分だったら、ここまでじゃなかったかもしれない。

でも今はもう、あの温かさと優しさと甘さを知ってしまったから。直輝と離れることなど、今さらもうできないと有衣は思った。

「きつとさあ、真面目な人なんじゃない？」

「真面目？」

「何にも言ってくれないで態度おかしくなるのもどうかとは思っけど。」

高校生だったなんて知って、びっくりしたとか、不安になったとか、そんなんじゃないのかな」

「不安、なんてなるのかな」

「普通なるでしょ。だって一歩間違えたら犯罪じゃん」

「は、犯罪って、私もう18だし、しかも同意なのに」

「関係無いよ。未成年だと親が訴えたらアウトだし」

「清香さんはそんなことしないよ」

「いや、例えばの話だって。そういう微妙な問題もあるから、気にしてる可能性もある、ってこと」

「みどり、良く知ってるね」

「…まあ、ちょっと必要に迫られてね。

でも、そうやって悩んでるってことはさ、裏を返せば有衣がそれだけ大事、ってことじゃない？

だから有衣もそう思って、もう少し様子見てみたらどうかなあ」  
なんとなく、釈然としないものを残しつつ、有衣はとりあえずみどりの言葉を受け入れた。

こんなことになるなら、制服なんて着て行かなければ良かった、と思う。

でも今さらどうにもならないし、たとえ制服を着ていなくても年齢は変わらないのだ。

みどりの言葉通り、もしも“大事”の裏返しなら、それはそれで嬉しいと思う。

だが、いつまで直輝とぎくしゃくした時間を過ごさなければならぬのだろうか、と思うと憂鬱になった。

## 19 (後書き)

直輝しつかりしろ(笑)状態です。

慧を羨ましいとか思っている場合じゃありません^^;

有衣もついに直輝の挙動不審の原因に気づきました。

でもほんとに、自分じゃどうしようもないことで距離置かれたら、  
哀しくなりますよね。

慧とみどりの関係は、別の話で書きますが、

ちよつとこつちと時期がリンクしてるので、どうしても出てきてし  
まいます。

そっちはもう少しだけお待ちくださいね。

4限目の終了を知らせるチャイムが鳴ってしばらく経っても、有衣は立ち上がれないでいた。

体が鉛のように重い。

周りの声が遠く聞こえ、逆に自分の鼓動や呼吸が大きく聞こえる。机に突っ伏したまま、有衣は手の中の携帯をぼんやりと見つめた。直輝とのメールはそこそこ続いているものの、昼休みにしていた頻繁なやり取りは、最近ではほとんどない。

忙しいのだと思っていたが、どうやら違うらしいということに気づいて以来、有衣から送ることに躊躇してしまう。

なんとなく直輝とシンクロしていたくて行っている屋上も、今は果てしなく遠く感じた。

「有衣、貧血？ 顔色かなり悪いよ……」

「うん、今日、二日目……」

心配して近づいてきたみどりに、有衣はなんとか答える。

普段はそうでもないが、毎月一度、このときばかりはかなり貧血がひどくなる。

連日の忙しさによる疲労も関係しているのか、今回はかなり辛かった。

「保健室で休んでたほうがいいんじゃない？ それか帰るか……」

「……保健室行く」

「うん。じゃ、一緒に行つてあげるから」

みどりに支えられて立ち上がり、保健室に向かいながら、こんなときでも携帯を手放せない自分に有衣は苦い思いを抱く。

期待することが、やめられないのだ。

だから、躊躇しながらも結局メールを送ってしまうし返信も待つてしまう、という堂々巡りに陥る。

そんなことが、体調の悪さに拍車をかけているような気がして、有

衣は重い溜息を吐き出した。

痛い。気分が悪い。…それから、寂しい。  
言えば、直輝が心配してくれることはわかっている。

それでも、今のふたりの状況を考えると、こういうことで気を引こうとするのは卑怯な気がして嫌だった。

鳴らない携帯を握りしめながら、有衣の意識は暗く沈み込んだ。

午後の授業が終わり、有衣の荷物を保健室へ持っていきこうとしたみどりは、いつもよりひとつ多い鞆に眉を顰めた。

中身はもうわかってる。

制服をきらう直輝を気遣って、有衣はここ何日かわざわざ着替えを持って来ているのだ。

真面目なのはいいが、それで有衣が傷つくのは見るに堪えない。

真っ白な顔色で、ベッドに横たわる有衣を見つめて、みどりは小さくため息をついた。

その気配に有衣は目を覚まし、体を起こすと一瞬くらりとしたが、なんとか大丈夫そうだった。

「…もう、終わったの?」

「うん。どう? 少しは具合いい?」

「んー…大丈夫」

「お願いして今日は早めに帰ってきてもらうとか、できないの?」  
有衣の性格上、そういうことは言わないとわかってはいても、みどりはそう聞かずにはいられない。

このまま小さい子どもの世話をしていたら、有衣は本当に倒れてしまいそうに見える。

だが案の定、有衣は首を横に振った。

「大丈夫。それに、心配かけるのやだ」

その言葉に潜む本当の意味を、みどりも知っている。

どうあっても自分では言わないつもりだとわかり、みどりは今度こ

そ大げさにため息をついた。

なんとか保育園へ行くと、珍しく晴基は寝ていた。

話によると、お昼間に遠足があったようで、疲れてしまったらしい。起こすのもかわいそうで、そのまま抱いて帰ろうかと思っただが、有衣は荷物も多くしかも今日は体調も悪い。

この状態で、眠って脱力した3歳児を連れ帰るのは、かなり至難の業だ。

どうしようか、と黙っている、見かねた譲が口を開いた。

「俺、今日は暇だし。晴基連れてってやろうか」

「え、大丈夫なの？」

「ああ。それに、顔色超悪いし、荷物も多すぎだし」

「じゃあ、お願いしようかな。…ありがとう」

限界に近い有衣は、譲の厚意に素直に甘えることにする。

結局、譲が晴基を抱っこし、有衣の荷物も持つてくれることになった。

途中で寄るスーパーでも、有衣はベンチに座って待ち、譲がメモを持って買い物をした。

ようやく家につくと、玄関先で有衣は晴基と荷物をそれぞれ受け取る。

晴基をベッドに寝かせ、もう一度玄関に戻って譲に声をかける。

「ほんと助かった。ありがとうね」

「それはいいけど。ほんとに大丈夫か？ ハルパパにメールとかした？」

「大丈夫。…直輝さんには、言っていないよ。てか、今は言えないし」

「なんか、そういうのって変じゃね？ 付き合ってるのに遠慮とかだいたい、高校生なのがそんなに悪いことかよ」

「うん…。でも、ほんとに大丈夫だから。今日は、ありがとう」

譲の言うことも、尤もだ。

内心同調したいと思う面もある有衣だったが、はっきりとは言わず

に笑って済ませる。

何を言っても仕方ないと思ったのか、譲はもうそれ以上は何も言わず、お大事に、とだけ言って帰っていった。

年齢のことは、直輝の気が済むのを待つしかないのだと、有衣は思っていた。

それに下手にこちらから何かを言って、本当に離れて行ってしまうことになったら、と思うと怖かった。

譲がエントランスを出ると、ちょうど直輝がタクシーから降りる姿が見えた。

直輝も譲の姿に気づき、驚いたような顔をした。

「こんにちは」

「こんにちは。…どうか、しました？」

「いえ、ハルが寝てしまつて、彼女も具合が悪そうだったので、付き添ってきました」

「そう、ですか」

譲は、直輝が自分を見るその視線の中に、はつきりと嫉妬のような敵愾心のようなものを感じ取っていた。

それは以前から感じていたものだが、今日はさらに強い。

そんなに有衣を思っているなら、どうして有衣にあれほど悩ませたままにいるのか、逆に不思議だ。

強がる有衣は見ていて痛々しいほどで、それを間近に見る譲としては、何とかしてやりたかった。

「ひとつ、お尋ねしたいことがあるんですが。…彼女の、友人として」

直輝を煽ることも忘れない。

案の定、最後の言葉に直輝はぴくりと反応した。

「何でしょう」

「高校生だと、何が悪いんですか」

譲の問いに、直輝はぎょつとしたように譲を見つめる。

つい最近まで自分も知らなかったのに、なぜ譲は知っているのだろう。

有衣の“譲くん”と呼んでいた声が、耳元でちらついた。

「…なんで知ってるんだ、って思いました?」

凶星を突かれた直輝は、黙ったまま譲の次の言葉を待つ。

「俺、彼女の後輩なんですよ」

「後輩…じゃあ、君も、高校生なのか?」

「制服着てなければわからないでしょう。でも、中身は同じだ。

あなたにとつての彼女も、そうじゃないんですか。」

今日、俺が勝手にここに来たのは、悪かったとは思ってます。

けど、あなたが彼女に距離を置くようなことをしてなかったら、

間違いなくあなたを頼りたかったと思いますけど。

…生意気言つてすみません。じゃあ、失礼します」

直輝は、何も言えないまま譲の後ろ姿を見送る。

譲の言葉は、的を射ているだけに直輝の胸に突き刺さった。

慧に、有衣が具合が悪いらしいと聞いて、急いで早退して戻ってきたのだが、人伝の情報に胸が苦しかった。

有衣が自分を頼れない状況を作り上げたのは、自分自身であると直輝もよくわかっている。

直輝は、自身を叱咤し、エントランスへ足を急がせた。

まだ、夕食の準備を始めるには早い時間だった。

買ってきたものを冷蔵庫にしまうと、有衣は先に掃除をしようと思

い立ったが、まず着替えることにする。

鞆に手を伸ばそうとした時、視界の中でチカチカと白っぽい星が瞬

くのを感じた。

まずい、倒れる前兆だ。

とにかくしゃがみ込もうとローテーブルに手をついたが、置いてあ

った写真立てに手が当たって落ちてしまった。

どうにかやり過ごして、落ちた写真立てに目をやると、ストップパ

が

が

が

外れ、中の写真が外に出てしまっている。

直輝の亡くなった妻と、まだ生まれたばかりの晴基が映っているものだ。

その写真を手に取り、有衣はぼんやりと眺める。

ここにこの写真と、直輝とふたりで写っている写真があるのは、有衣もだいたい前から知っていた。

だがいつからか、まともに見ることができなくなって、掃除の時も見ないようにしていた。

多分、直輝を好きになってしまった頃からだろう。

視線が恐ろしかったのかもしれない。

この、儚げな、綺麗なひとには、絶対に勝てないと思うから。

想いに優劣をつけるのは愚かだと知ってはいても、どうしても、その思いは抜けなかった。

何の気もなしにしたことだった。

有衣は、写真をただ元の位置に戻そうと、写真立てに入れようとしただけだった。

そのとき、写真の裏側に文字が書いてあるのが見えた。

“Hospital, Yui & Haruki”

「ゆ、い…?」

衝撃だった。

そして瞬時に、ここで直輝に初めて会った日のことが思い出された。晴基に名前を教えていた時の、派手な食器の音、直輝の驚愕の表情、そして妙な質問。

同じ、名前だったのだ。

だから、名前の漢字まで聞いてきたのだ。

「唯一のゆい…。唯…」

単なる漢字の説明なのに、“唯一”という単語がひどく重たく感じ

られる。

有衣は、もうひとつ思い出してしまったことに、眩暈を感じた。直輝は、有衣が晴基の母親に代ることが、願望だったと言ったのだ。それはただ単に代わるものになることだったのだろうか。

本当は、同じ名前の有衣に、身代わりになってほしかったのではないだろうか。

だが、有衣が高校生だと知って、それはあまりにも不自然だと思っ  
て、それで急に距離を開けたのだろうか。

そう考えると、全ての辻褄が合ってしまうような気がして、有衣はシヨックのあまり茫然とした。

「ま、まさか……」

必死にその考えを打ち消そうと、できるだけ静かに写真を元の位置に戻す。

しかし一度考え出してしまったものはなかなか消えてくれない。

それどころか、正解はそれしか無いようにさえ思えてくる。

落ち着きを取り戻そうと、キッチンから水を取ってきたが、頭がくらくらくして足取りがおぼつかない。

急に嫌な汗が吹き出し、視界がだんだんと白く覆われ出した。

このままだと倒れてしまう、と有衣は焦り、手に持ったグラスをどこかに置こうとした。

が、有衣の意識はそこまでしか保たれなかった。

手から滑り落ちたグラスは床に落ちて割れ、有衣はその上に倒れ込んだ。

20 (後書き)

譲からのパンチもあり、直輝も吹っ切れそうですね。  
でも有衣は名前のことを知ってしまいました><  
直輝、がんばりどころです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8501y/>

---

Home Sweet Home

2012年1月5日01時45分発行